第2章

新地町 震災の記録

急いで船を沖に出した。
見る間に高波。壁のような波をこえた。
「もどろう、家族や人が心配だ、
船よりもそっちだ。」

——30代 男性 漁師
（新地町震災・復興記録集づくりワークショップより）

新地町・東日本大震災の証言と記録

平成23年
3月11日
午後2時46分
東北地方太平洋沖地震発生

三陸沖を震源として発生した巨大地震は
東日本大震災を引き起こし、東北から関東にかけての
東日本一帯に甚大な被害をもたらしました。
なかでも地震により発生した大津波は、多くの人命や
住まい、そして美しいふるさとの姿を奪いました。
さらに、福島第一原子力発電所事故が発生し、
放射性物質による健康への不安や、
農・漁業をはじめとする産業への風評被害など、
新地町は未曾有の困難に直面しました。
この難局を乗り切り、ふたたび美しいふるさとをとり戻したい。
自然が輝き、笑顔があふれる町を――。
50年後、この土地で暮らす「新地人」。
その未来のために
震災の痛み、そして復興の足跡を記録します。

平成23年

3月11日（金）

巨大地震の発生と大津波の襲来

平成23年3月11日金曜日、14時46分。三陸沖を震源とした大地震が発生しました。地震の規模を示すマグニチュードは9・0、日本観測史上最大の超巨大地震であり、新地町も震度6強の揺れに見舞われました。さらに地震により引き起こされた津波は9・3m以上※（相馬験潮場）にも達し、この津波が町を襲い、甚大な被害をもたらしました。

写真 2-1　震災前の港
穏やかな海が広がる漁港周辺

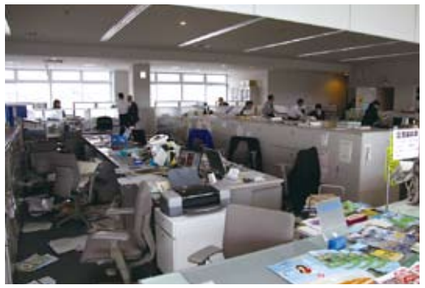


写真 2-2
地震直後の役場内
棚からものが落ち、資料が床に散乱した

写真 2-3
地震直後の図書館内
落下した図書で床が埋め尽くされた

3月11日のタイムライン

14時46分	東北地方太平洋沖地震 震度6・1
14時49分	大津波警報発表
14時50分	新地町災害対策本部設置（庁議室） 避難指示発令
15時51分	相馬で9・3m以上の津波を観測
18時20分	大戸浜地区避難完了
18時40分	今泉地区避難完了
18時45分	自衛隊に災害派遣要請
19時03分	原子力緊急事態宣言（福島第一原子力発電所）
20時15分	県に救援物資を要請
20時50分	福島第一原発1号機の半径2㎞の住民へ避難指示
21時20分	県に仮設トイレ50を要望
21時23分	福島第一原発1号機の半径3㎞圏内の住民に避難指示及び福島第一原発1号機の半径10㎞圏内の住民に屋内退避指示

※験潮場が津波被害により途中から観測データを送信できなくなったため、それ以降については記録が残っておらず、後続の波がこれよりも高くなった可能性を考慮して「○m以上」と表現している

震災の記憶　あの日、あの時

三陸で学んでいた教訓

旅館「朝日館」女将・語り部
村上美保子さん（釣師）

「津波が来る！」。地震で自宅の廊下から真っ黒い泥がブクブクと出てきたとき、そう思いました。小学生時代を三陸で過ごした私は、過去の大津波の話を、大人や学校の先生から聞かされていたからです。すぐに夫と車で避難所に向かいました。途中、息子のことが気がかりで会社の工場まで行きましたが、安否は分からず、仕方なく高台にある商工会の駐車場まで避難しました。到着して5分もすると津波が来ました。真っ黒な高い壁のような波が押し寄せ、あっという間に家や車が流されてきます。その光景はまるで映画でも見ているようでした。その後、息子とも奇跡的に連絡がとれ、避難していた役場で再会。三人で抱き合い号泣しました。

写真 2-4　液状化現象のため地表に水が噴出

写真 2-5　ひび割れにより通行止めになった道路

写真 2-7　崩れた石塀

写真 2-6　地割れが発生した地面

写真 2-9　所庭に避難する新地保育所の子どもたち

写真 2-8　図書館・改善センターから役場駐車場へ避難する中高生

大津波

写真 2-10（上）2-11（下）　津波襲来の瞬間
白波をたてながら沿岸部を襲う大津波。津波の浸水は、町の面積の約５分の１にあたる約 9.4㎢に及んだ

震度6強 長く続いた揺れ

大きく長く続いた揺れでした。

発生直後の大きな揺れ、それに続く横揺れと、断続的に揺れが続きました。町中が騒然となるなか、それぞれが懸命の対応をしました。

車で走行中の人は波打つ道路を前に思わず急停止したといい、浜の漁師は漁船を沖に出すため港に走ります。保育所では保育士が身を挺して子どもたちを守り、いち早く所庭に連れ出しました。新地駅では、停車中の車両及び駅舎が津波により流失。偶然乗車していた警察官2名と運転手らが連携し、乗客全員を町役場まで無事誘導しました。駅近くの踏切では遮断機が下りたままとなり渋滞が発生。遮断機を手で上げて通行させた人もいました。

町の消防団員は、避難誘導をしながら、災害対策本部のある町役場に駆けつけました。

写真 2-13　津波により海と陸の境界が崩れた

写真 2-12　高台から町の様子を呆然と眺めるしかなかった

写真 2-14　勢いを増した波が田畑をのみ込んだ（木崎地内）

襲い来る大津波の脅威

14時49分。地震発生から3分後、けたたましくサイレンの音が鳴り響くなか、大津波警報が発表されました。

海岸付近の人は急いで安全な高台へ避難するよう、町の防災無線を通じて緊急避難指示の警報が連続して流れました。前年の秋の防災避難訓練の通りに、多くの人が助け合いながら避難行動を起こしました。しかし、避難せずに留まった人や、一旦は避難したものの、戻って犠牲になった人もいました。

15時40分。想像を絶する大津波が町を襲いました。津波はどす黒い壁となりものすごい早さで押し寄せました。町の津波ハザードマップでは、津波はJR常磐線で止まると想定されていましたが、それをはるかに越え、国道6号をも越えたのです。想定外の大津波により多くの人が犠牲となりました。

写真 2-15　小川地内

写真 2-16　卒業式が終わり生徒を送り出したままの尚英中校舎

写真 2-17　土砂崩れの現場

震災の記憶　あの日、あの時

教会で過ごした一夜

三宅信一さん（埒浜）

外出先の相馬市で被災した私は、必死の思いで埒浜の自宅まで戻りました。津波で自宅は無残な姿でしたが、家族は裏山に駆けのぼり無事でした。「じいちゃーん」と呼ぶ孫の声を聞いたときは、全身の力が抜けるほどホッとしました。それから家族で高台にある教会施設に移動し、そこで一夜を過ごしました。雪が降る寒い日で全身びしょ濡れだった私に、近所の方がシャツやズボンを貸してくれ、さらに教会にあったシーツや座布団にくるまり、寒さをしのぎました。道路は寸断され孤立状況でしたが、幸い携帯電話で外部と連絡でき、翌日、自衛隊の方々の誘導で歩いて福田小学校の避難所へ。そこで地元の皆さんと会い、とても安心し嬉しかったのを覚えています。

写真 2-18　新地駅の駅舎と車両も流失

写真 2-19　多くの車両も津波により流失した

写真 2-20　役場東側

写真 2-21　津波を目の当たりにし混乱する町民（尚英中付近）

写真 2-22　多くの町民が車で避難した（尚英中校庭）

震災の記憶　あの日、あの時

地元消防団として

新地町消防団 副団長
角田正悦さん（菅谷）

会社で旋盤の仕事中に地震は来ました。揺れが収まるや、すぐに役場に駆け付け、津波の襲来を役場屋上から目撃しました。翌日から消防団副団長として、行方不明者の捜索などにあたりました。

12 日には 66 名、翌 13 日は約 130 名が集まり、行方不明者の捜索にあたりました。12 日に発見した中には、団員 1 名も含まれていました。その団員は、埒浜地区の団員で、地震後自宅に戻って母親を避難させ、もう一度避難誘導に戻る途中に津波にのみ込まれました。田んぼで車の中から発見され、無念でした。

行方不明者の捜索は、災害対策本部で打合せ後、捜索にあたりました。消防団は遺体搬送に全面的に協力し、遺体発見の連絡が入ると、地図で場所を確認して現場へ。担架に乗せて搬送するのですが、遺体を担架に乗せた所で手を合わせ黙祷してから安置所まで搬送しました。その後は警察が確認・検視し、消防団が発見場所と時間を記録・報告し、町内の施設に搬送したあと、当日中に相馬へ移す。ほとんど毎日がそのくり返しでしたが、「早くご家族の元に帰してあげたい」との思いでやりきりました。

団員は、弱音を吐く人もなく、全面的に協力してくれました。皆で協力して頑張ろうという気持ちでなんとかやりきれたと思います。

写真 2-23　ガレキに覆われた道路

写真 2-25　3 月 11 日 午後 6 時頃の新地町内

写真 2-24　くっきりと水の跡が残る（中島地区）

大津波による壊滅的な被害

新地町を襲った大津波は、歴史的にみても最大規模であり、１１０名の犠牲者を出すなど、未曾有の被害をもたらしました。

津波の浸水は、町の総面積46・35㎢の約５分の１にあたる９・４㎢に及び、15行政区30地区のうち、木崎、埒浜、作田、岡、中島、小川、釣師、大戸浜、今泉、藤崎、富倉の11地区が浸水し、埒浜、中島、釣師、大戸浜地区はほぼ全域で流失、全壊しました。

津波によるり災の内訳は、全壊４６７戸、大規模半壊30戸、半壊19戸の計５１６戸。

家屋だけでなく、田んぼや畑などの農地についても、多くが海水に浸かり、ガレキも大量に漂着し、耕作不能となりました。

交通網は、ＪＲ常磐線が亘理駅から駒ケ嶺駅の間約25㎞にわたり、４駅が流失・損壊、線路や鉄橋は流されて不通となり、新地駅は駅舎も線路も流され、転覆した電車がくの字に折れ曲がった姿をさらしました。

沿岸の主要県道である相馬亘理線は至るところで流失し、橋も流され通行不能となりました。

漁業では、大津波警報後すぐに沖合に避難し流失を逃れた船が36隻中34隻で、一昼夜沖に留まり翌日帰港しました。その一方で漁船９隻が流失し、一部は、海岸から西に約１㎞のところまで流され、漁具なども国道６号付近まで流失しました。

海中や海底には膨大なガレキ、車両などが沈み、相馬双葉漁業協同組合新地支所は全壊しました。海岸線とその周辺では、防風林と防波堤が津波により破壊され流失しました。さらに福島第一原発事故による影響で本格的な漁の再開ができないでいます。

公共施設については、湛水防除施設（３カ所）、新地浄化センター、今泉の排水処理施設は壊滅し、上下

震災の記憶　あの日、あの時

夢ではなかった大津波

新地町消防団第２分団長
小野茂夫さん（新地町）

宮城県亘理町で揺れを感じ、すぐに帰宅の途に着きました。国道６号を避けて山沿いを移動中、JR 坂元駅が津波にのまれるのを目撃。その衝撃の光景に夢かとも思いました。「新地はどうなっているんだろう」と、必死で帰って来ました。家族の無事を確認後、役場に向かいました。役場には行方不明者を捜してくれと町民の方が心を乱してかけつけていて、騒然としていました。21 時頃に救助活動を行いましたが、震災当日はその作業が最後で、明るくなるのを待つことになりました。夜が明け明るくなるにつれ、地震・津波の被害の全容が分かってきました。「なんだこれは？」涙すら出ない、体験したことのない心境でした。

12 日から行方不明者の捜索活動が始まりました。目視による捜索で軽いガレキはよけましたが、重機がないと無理ということが分かり、この悲惨な現実をどうしたら良いかと思っていましたが、自衛隊が入ってくれ、この人たちと一緒にやれば何とかなるかもしれないと心強く思いました。

放射能による影響も分からず心配でした。線量計もなく、色々な情報が錯綜し、あの頃の不安感は大きく、精神的にもこたえました。

これから、新地町の復興に一歩でも近づけるよう、この場所に住んでいるからこそ、私たちが頑張らなければいけないと思っています。

写真 2-26　木崎地内

写真 2-27　津波被害前後の沿岸部の様子
津波により、一瞬にして町並みが変わってしまった

塚浜（らちはま）

写真 2-28（右）　寸断された道路。電柱や木が横たわる
写真 2-29（左上）海抜を示した電柱。海抜 1.5m とある
写真 2-30（左下）塚浜地内

釣師（つるし）

写真 2-31（右）　津波の被害を受けた漁協新地支所
写真 2-32（左上）ガレキがたまる釣師地内
写真 2-33（左下）釣師浜海水浴場南側

水道管も損壊しました。

また、電柱・電線の多くも倒壊、流失し、電力供給も一時停止しました。さらに道路網が寸断され、ガソリンや軽油が供給されなくなり、深刻な燃料不足を招くことになりました。灯油の不足は寒さ対策でも大変で、こうしたライフラインのストップは、被災者の避難生活をより過酷なものとしました。

町内では、津波被害だけでなく、地震被害も発生しました。震度6強の揺れにより、倒壊や地盤沈下、瓦の落下や外壁の亀裂など、多くの家屋が被害を受けました。また、地盤沈下により、水が湖のようにたまって引かない状態が続きました。

地震によるり災の内訳は、全壊7戸、大規模半壊15戸、半壊92戸の計114戸にのぼりましたが、犠牲者はいませんでした。

また、文化財も大きな被害を受け、県指定史跡となっていた「観海堂（かんかいどう）」が津波により流失しました。（37頁写真参照）

大戸浜（おおどはま）

写真 2-34（右）　大戸浜地区から海側
写真 2-35（左上）大戸浜緑地広場西方に流入したガレキ
写真 2-36（左下）大戸浜地内

今泉（いまいずみ）

写真 2-37（右）　今泉地内
写真 2-38（左上）今泉公会堂
写真 2-39（左下）津波により崩落した県道相馬亘理線

［写真：3月11日以降の撮影］

無事を祈って家族の絆

震災発生後、すぐに家族と連絡がとれた人は少数で、大半はその日の深夜から翌日となりました。家族の生存を信じて、何度も避難所の掲示板を確認する人、知り合いを訪ね回り安否確認をする人など、避難所はしばらくのあいだ騒然とした雰囲気となりました。自分の家族の無事を確認し安心できても、周りにはまだ連絡がとれない人や家族が行方不明の人が多く、心の中で安堵するだけでした。

その後も断続的に余震が発生し、不安が募ります。津波で家屋が流失した人、ライフラインの寸断で自宅生活が困難になった人など、多くの町民が避難所に集まりました。また、ペット同伴者は避難所の駐車場でライフラインが復旧するまで寝泊まりを続けるなど、過酷な状況は続きました。

JR新地駅

写真 2-40（上）　津波により破壊された電車と跨線橋（JR 常磐線新地駅）
写真 2-41（下）　震災前の JR 常磐線新地駅

新地駅は、ホーム・跨線橋を残して駅および周辺一体が壊滅。停車中の列車も大破した。乗客は、たまたま乗り合わせていた警察官２人の誘導で町役場に避難し、乗務員も跨線橋に避難して無事であった

震災の記憶　あの日、あの時

黒い渦と白い壁

谷　隆さん（埼浜）

高台で妻と共に津波の様子を見ていました。第一波は大きくありませんでしたが、徐々に水位が増し、黒い渦のような波が重なり、あっという間に建物や道路をのみ込みました。沖の方では巨大で真っ白な壁のような波が迫ってきます。その波が黒い渦と重なり、大丈夫と思っていた高台にも押し寄せ、私たち夫婦も近くの木々に捕まって流されるのを免れました。夫婦で高台にある教会に避難したものの、私は救助要請のために地区長の三宅信幸さんと福田小学校まで行きました。その後、保育所まで息子を迎えに行き、避難所で父子で一夜を過ごしました。おにぎりが出たのですが、息子は「お母さんにあげる」と食べようとしませんでした。母親の偉大さを実感しました。

中島（なかしま）

写真 2-42　中島地内

木崎・作田（きざき・さくだ）

写真 2-43（右）　国道 6 号を越える津波（木崎地内）
写真 2-44（左上）ガレキがたまった JR 常磐線の線路
写真 2-45（左下）津波被害を受けた作田地内

小川・岡（おがわ・おか）

写真 2-46（右）　浸水した小川地区
写真 2-47（左上）国道 6 号を越える津波（岡地区）
写真 2-48（左下）田んぼに流入したガレキ（小川地区）

富倉・藤崎（とみくら・ふじさき）

写真 2-49（右）　打ち上げられた漁船
写真 2-50（左上）田んぼに流入したガレキ（富倉地区）
写真 2-51（左下）国道 6 号バイパス下も浸水

[写真：3月11日以降の撮影]

平成23年

3月12日(土)

大地震から一夜明け 懸命な捜索活動が始まる

余震が続き、寒さと不安の中で過ごした一夜が明けました。徐々に被害の状況が明らかになるにつれ、現実の冷酷さは想像を超えるものでした。そのなかで行方不明者の捜索を第一に、自衛隊、消防、警察関係者らによる活動が始まりました。大量のガレキが散乱し、ぬかるみに足をとられながらも必死に前へ進みました。

写真 2-52　津波により流失した車

写真 2-53
線路を覆う
ガレキ

写真 2-54
沿岸部の
道路状況

3月12日主なタイムライン

1時20分	自衛隊19名到着
5時44分	**福島第一原発1号機の半径10㎞圏内の住民に避難指示**
7時40分	給水車到着
10時00分	仮設住宅440棟を県に要望
11時00分	佐藤雄平県知事来庁
13時05分	漁船36隻中34隻帰港
14時10分	勤労青少年ホームに山元町から60名避難
15時36分	**福島第一原発1号機で水素爆発と思われる爆発**
16時30分	エコノミー症候群注意喚起防災無線放送
17時10分	福島第一原発爆発をテレビで確認
18時25分	**福島第一原発の半径20㎞圏内の住民に避難指示**
20時20分	大津波警報から津波警報へ切替

写真 2-55　震災から一夜明け、徐々に被害の状況が明らかになっていった

写真 2-57　行方不明者の捜索活動を開始

写真 2-56　津波によりなぎ倒された電柱

懸命な捜索活動 ガレキとの闘い

早朝から、行方不明者の捜索活動が始まりました。大津波に浸食され、それまでの自然豊かな町並みは一変していました。多くが海水に浸かり、大量のガレキや水没車両、漂流物などが点在します。そのなかを当日深夜に到着した自衛隊をはじめ、消防や警察機関、町の消防団も活動に加わりました。ぬかるみに足をとられ、折り重なるガレキを手作業でかき分けての捜索です。

この捜索活動により発見された遺体は、町内の施設に搬送された後、相馬市内の遺体安置所に移されました。また、12日より毎朝、各機関の代表者による災害対策本部会議を開催。状況報告や作業計画を確認し、現地作業に入りました。今後の捜索活動として重機の必要性、漂流物や金庫の回収方法なども話し合われました。

平成23年

避難所生活の始まり
―避難者数 2400人

想定外ともいえる大津波の襲来に、町民は必死の思いで避難所へ向かいました。避難途中に津波にのまれ、全身びしょ濡れになりながら運ばれてきた人もいます。当初、避難所となった新地町役場、総合体育館、福田小学校、尚英中学校、駒ケ嶺公民館には大勢の方が避難しました。

家屋が流失した被災者だけでなく、電気、水道などライフラインが不通となった方も避難しました。雪が舞う寒い夜でした。ほとんどの人が着の身着のままの避難で、空腹と寒さに耐え、家族や知人の安否を気遣いながら不安な一夜を明かしました。

被害の大きさから避難生活の長期化が予想されましたが、食料や衣料品、日用品などはほとんどない状態です。まずは食料確保が第一となり、各所で炊き出しが始まり、町が備蓄する災害非常食や地域の方々が持ち寄った米や野菜で、何とかまかないながら生活しました。

避難所への避難者数は、3月13日には、約2400人にのぼりました（146頁参照）。親戚や知人宅に身を寄せた人などを含めれば、その数はさらに多かったと言えます。避難所は地区ごとに分けられ、地域のコミュニティを維持し助け合いながら、避難生活をすることになりました。

町でも11日夜に救援物質と仮設トイレを、翌12日に仮設住宅、日用品と医薬品を県に要望し、ライフラインの早期の復旧に努めました。

■ 町内の主な避難所の最大避難者数

避難所	避難地区	最大避難者数
新地小学校	大戸浜・今泉地区	466人（3月16日）
総合体育館	大戸浜・今泉地区	440人（3月13日）
尚英中学校	小川・新地町地区など	448人（3月13日）
福田小学校	埒浜・作田・木崎地区	319人（3月13日）
駒ケ嶺公民館	駒ケ嶺地区など	257人（3月13日）

写真 2-58　避難所となった保健センター
釣師・中島地区などの方が避難

写真 2-59　避難所となった福田小学校。着の身着のままの避難となった

写真 2-60　長引く避難所生活
パーティションで戸別のスペースをつくった
駒ケ嶺公民館避難所

写真 2-61
避難所担当者の
引き継ぎノート
避難所のルールや、救援物資の量、その日の出来事などが細かく記載され、避難所の運営に役立った

写真 2-62　新地小学校避難所

震災の記憶　あの日、あの時

役立った避難所日誌

駒ケ嶺公民館
目黒寛子さん

震災直後から、駒ケ嶺公民館は地区の避難所になりました。11日の17時ごろから地区の女の人たちと協力して炊き出し。断水していましたが、幸い電気が使えたので、井戸水を汲んできて、2升の電気釜2つで何度もご飯を炊きました。その夜は、暖房を切らさないようストーブの給油で寝ずの番でした。翌日も朝昼晩の炊き出しなど、お世話係の皆さんと2晩寝ずに頑張りました。3日目はさすがに疲れて、長期戦を見越して交代で休むようにしました。

避難所の運営は、区長さんを中心に地区長さんや女性の方々が話し合いをし、役割分担を決め、みんなで協力しながら円滑に行うことが出来ました。3月21日に地区の避難所としては閉鎖しましたが、その日夕方から、原発避難など町外の方の避難所になりました。地元の方と違って意思の疎通がうまくいかなかったので、自炊ルールなど、話し合いながら独自の避難所ルールを作り、その都度見直しを行いながら対処しました。避難所の担当も東京等から支援の方が交代で来るようになりました。しかし状況がよくわからない。そこで避難所日誌を書いてもらうことにしました。そうすると、避難所の様子や経過がわかるようになりました。避難所日誌は、色々な方が支援に来てくれるときはとても効果的だと思いました。

みんなの優しさでできたカレーライス
― 避難所の声

避難所での食事は、おにぎりと味噌汁だけという日や、おかずも炒め物一品程度という日が続きました。若い人もいるから、ある日「カレーが食べたいね」という話になりました。でも肉もカレールウもない。たまたま自衛隊から少し唐揚げとフランクフルトの差し入れがあり、これを切って具にしてカレー作り。でも肝心のカレールウがない。そんなとき地元の方が「何か不自由はない？」と声をかけてくれました。「カレーライスが食べたいけど、カレールウがないの」と言ったら、近所の人全員に声をかけてくれました。そして固形の半分や使い残しのルウを持ってきてくれたんです。パックの半分や、その半分の半分を、それもちゃんとゴムでしばって出してくれた人がいました。本当にありがたかったです。あの時の感謝の気持ちは忘れません。

震災の記憶　あの日、あの時

命が大事、すぐに避難を

岡崎仁一さん（埒浜）

あの日は仕事中で、タンクローリー車での配送中に大きな揺れが来たため、一度はスタンドに戻りましたが、大津波警報で国道６号の上のほうに逃げました。自宅は海の近くですが、標高14～15メートルにあり、ここまで津波がくるとは想像もしていませんでした。しかし、２階建ての１階部分にまで津波が到達し、本当に驚きました。自宅に居た父も、まさかここまで水が来るとは思わずに、少し離れた小高い所で見守っていたため、そこで水をかぶりやっとの思いで一命を取り留めたといいます。一時はダメだと思ったほどです。

以前に実施した防災訓練で高台にある教会が避難場所と決まっていて、夕方４時過ぎに教会に着くと近所の方がたくさん避難していました。地震の後急に冷え込み、水をかぶった人のために服などを取りに自宅と教会を４回ほど往復しました。その日は教会で一夜を明かしましたが、翌朝、救助の人が来てくれたときは嬉しかったですね。

とにかく地震が来たら早く逃げること。それが後世に伝えるべき一番の教訓です。地震があったら海に近づかない。何かあると海の様子を見に行こうとする人がいますが、絶対に海に近づいてはいけないと思います。何事も命あってのこと。早々に逃げて身の安全を確保するべきです。自然の力にはとてもかないません。新地町が一日も早く復興し、若者の元気な町になってもらいたいと思います。

一時避難場所となった磯山聖ヨハネ教会
埒浜地区の方々が大勢避難していた教会。地震による被害のため取り壊され、現在は残っていない。震災以前は、様々なイベントが開かれる地域コミュニティの場として親しまれていた

岡崎さんの自宅敷地内から見た海。向かい側にあった家も津波により流された

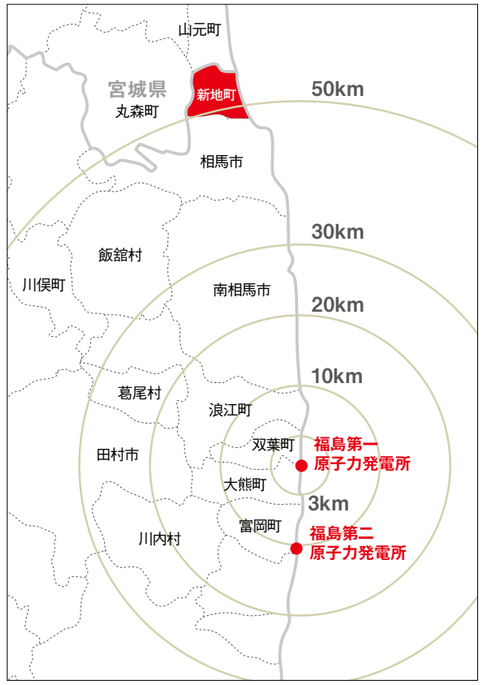
情報不足の中広がる不安
―福島第一原子力発電所

壊滅的な津波被害と余震が続く混乱の陰で、東京電力福島第一原子力発電所で発生した事故は刻々と悪化の一途をたどっていました。

正確な情報が得られず、テレビ・ラジオ・インターネットなどから得た断片的な情報をつなぎ合わせ、事態を把握するという状況でした。ライフラインが寸断されていたため、福島第一原発で何が起こっているのかさえ知らない人も多くいました。

新地町は、原発のある双葉郡から約50㎞の地点にあり、12日の時点では原発事故の深刻さは十分な理解に及びませんでした。しかし、このときすでに4基の原発は全交流電源を喪失するという事態に陥っており、3月12日15時36分、1号機の原子炉建屋が爆発。事態の深刻さは誰の目にも明らかになりました。

写真 2-63　爆発した１号機［3月12日 東京電力(株)提供］



図表 2-1　福島第一原発との位置関係

資料 2-1　原発事故の記事の割合は、日を追うごとに大きくなっていった（平成 23 年 3 月 12 日福島民友新聞掲載）

平成23年

3月13日(日)

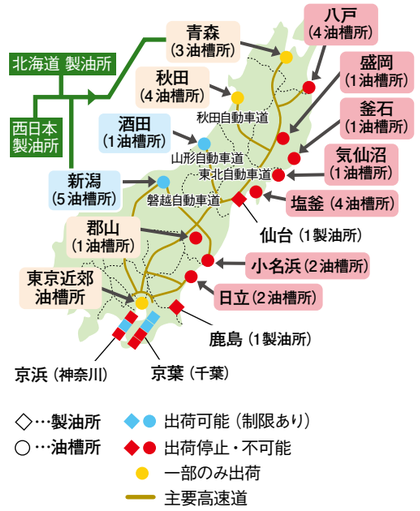
懸命な救助・救命活動が続くなか 新たに燃料不足の懸念が

この日も早朝から自衛隊・消防団などによる行方不明者の捜索が行われました。懸命な救助・救命活動が続くその一方で、ガソリン・灯油の不足という新たな問題が浮上してきました。宮城県や千葉県の石油コンビナートの被災が、東北の被災地への燃料支援を遅らせていました。

大津波で壊滅的被害
東日本大震災
沿岸の人、家流失
新地で列車転覆、大破

資料 2-2　新地駅の被害を報じた新聞記事
（福島民報 平成 23 年 3 月 13 日掲載）

東北・北関東太平洋岸に立地する２製油所および 16 油槽所のすべてが稼働停止または出荷不能状態となり、京浜・千葉地区においても７製油所の内４製油所が稼働を停止し、国内原油処理能力が約３割減少した。この他、東北６県で、サービスステーション約220カ所が被災し、設備・構築物の損壊・消失等により営業困難となった。石油製品輸送用タンクローリー約 150 台も被災するなど、多大な被害が発生。さらに、原子力発電所の事故が混乱に拍車をかけた。



図表 2-2　東北・関東地方の製油所・油槽所の稼働状況（3 月 12 日）［出所：石油連盟］

3月13日主なタイムライン

7時00分	消防団員130名捜索にあたる
7時30分	津波警報から津波注意報へ切替
8時26分	福田消防団OB 消防団活動にボランティアで参加
9時35分	神戸消防庁・滋賀県・岐阜県132人到着作業開始
10時20分	群馬の自衛隊10名（南雲3尉）
13時28分	菅野医院 役場3階で診察開始
13時30分	総合体育館から新地小学校へ避難所移設開始。住民は、各地区毎に移動（新地小学校・駒ケ嶺公民館）
15時30分	自衛隊炊飯車到着
17時00分	県から水到着（7500本）
17時58分	津波注意報解除 避難指示解除
23時40分	振興局へガソリン200ℓ、灯油500ℓ要請

震災の記憶　あの日、あの時

いつまでも感謝を忘れずに

菅野いな子さん（今泉）

「あの津波　夢であってと　願うだけ」。

体育館での避難生活中、救援物資の中に子ども向けの自由帳を見つけました。それを一冊もらって、震災からの日々を綴った川柳を書き始めました。「いち早く　孫の手を取り　避難所へ」、「一日を　精一杯　過ごすのみ」など、震災での教訓を後世に残そうと当時の辛かった心境を率直に綴りました。「食事班　今日は何を作るやら」この句は、避難所の食事班の責任者として日々格闘したときの句です。毎日3食、約500人分をどう作るか。十分な食材もなく本当に大変でした。将来への不安や心配で夜も眠れないなか、本当によくやり遂げられたな、と思います。ボランティアの方々が全国から訪れ、自家製の野菜や手編みの靴下など数多くの救援物資もいただきました。現在も交流を続けている方がいますし、それに応えるためにも私たちが元気で頑張らなければと思います。全国から応援していただいた気持は忘れません。感謝の気持を忘れないようにしたいです。自然災害はいつどこで何があるか分かりません。どこかで災害があったら、今度は私が全国どこにでも応援しに行きたいと思っています。

原発事故による放射能の風評被害の影響はとても大きいです。今は、「安全ですから」と言って食べてもらっていますが、本当はそんな能書き無しで新地町の魚もお米も食べてもらいたい。そんな日が早く来ることを願っています。

仮設住宅の共有スペースに貼られた川柳

震災後詠み続けた川柳ノートは、9冊にのぼる

避難所となった新地小学校体育館
一時は約 500 人が、間仕切りもない中で避難生活を送った

続く捜索活動 地区ごとの避難所生活へ

早朝から町の消防団員約130名、さらに消防団OBが加わり、自衛隊員も増員されて本格的な捜索活動に入りました。

さらに、緊急消防救助隊が神戸市、滋賀県、岐阜県から入り、救助活動にあたりました。

午後になると、総合体育館から新地小学校へ避難所を移設しました。コミュニティ維持のため、各地区ごとに移動しました。

避難所では、食事をはじめ、生活必需品が足りず、不自由な生活を強いられていましたが、仮設トイレや自衛隊の炊飯車が到着するなど、長期化を想定した避難所生活の改善に取り組みました。

また、切迫する燃料不足を改善するため、町では、ガソリン・灯油を相双地方振興局へ要請しました。

平成23年

3月14日(月)

福島第一原発事故の深刻さを増す燃料不足

震災から3日を経て、いよいよ津波被害の深刻さが判然としてきました。そして、追い打ちをかけるように原発事故のニュースが飛び込んできます。燃料不足は深刻さを増し、日常的な移動だけでなく、被災地への支援輸送も困難にしました。ガソリンスタンドには連日給油を求める車の長い列ができました。

写真 2-64　建物の基礎部分だけが残った［3月16日 撮影］

写真 2-65　町役場屋上から見た沿岸部［3月16日 撮影］

3月14日主なタイムライン

6時45分	電話回線復旧
10時30分	自衛隊より、宮城県沖で3mの津波確認ただちに避難の防災無線放送
11時00分頃	**福島第一原発3号機で水素爆発と思われる爆発**
11時09分	消防より、原発3号機爆発の模様屋内に入れとの指示
11時13分	屋内待避指示防災無線放送
11時15分	テレビ・保安院で爆発音有りの情報あり

第一原発3号機水素爆発

―屋内待避指示が発令

福島第一原発の事故は緊迫の度合いを増していました。

11時頃、原発3号機の原子炉建屋が爆発。多くの国民が注視する中での出来事に事故の深刻さをより印象づけました。これを受けて町では、11時13分、屋内待機指示を防災無線で発令し、外出を避けるよう町民に呼びかけました。

さらに13時25分、原発2号機の冷却機能が喪失し炉心露出、炉心損傷が始まったと発表があり、3基の原発が相次いで炉心溶解事故を起こすという極めて深刻な事態に国内外でも騒然となり、自主避難をする世帯など、原発事故に関する問い合わせが増加しました。町では緊急事態に備えて、安定ヨウ素剤の配布を検討するなど、対応に追われました。

写真 2-66　上空からみた新地町。内陸部まで浸水している様子がわかる［3月29日 撮影］

写真 2-67　大破した車両が横たわる JR 新地駅［3月29日 撮影］

震災の記憶　あの日、あの時

またこの海で漁業を

相馬双葉漁協新地支所長
小野重美さん（釣師）

尚英中の卒業式に出席後、自宅で地震にあった私は、船を出すため港へ行きました。2～3km沖に出たとき第1波に合い、さらに第2波が向かってきます。とても大きな規模でしたが、波に対して斜めに進むことでなんとか乗り越えました。転覆した船もあり、観音丸の鈴木操さんは真冬の海に投げ出された漁師を救出、応急処置で一命を取り留めることができました。海上で一晩を明かし、翌朝帰港。陸に上がったとき、見慣れた街がなくなっている光景にがく然としました。避難所では家族や近所の人たちに会い、当時の海上の状況を話し、行方不明の仲間の無事を祈りました。津波で犠牲になった方々のためにも、以前のような海や町を取り戻したいと思います。

平成23年

3月15日（火）

道路網の寸断で物資の不足続く

道路網の寸断により輸送ルートの確保ができなくなり、流通網は停止状態となりました。スーパーやコンビニの棚からは商品が消え、休業を余儀なくされ、食品や生活用品の確保がますます困難となりました。さらに放射性物質拡散の不安も高まってきました。

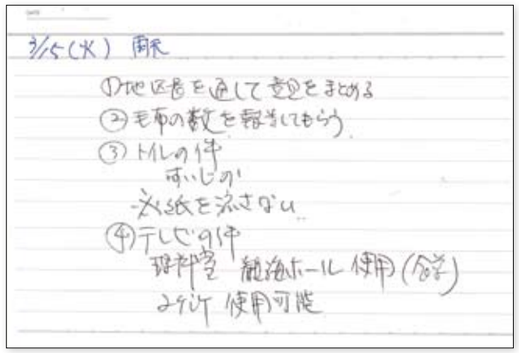


写真 2-68
3月15日の避難所ノート
（新地小学校避難所）
12 日から 15 日は、生きること、生かすことに懸命だった日々であり、写真等の資料があまり残されていない。そのため、避難所ノートはこの間の避難所および町の様子を知る貴重な資料である

写真 2-69
下水道状況の調査
陥没や隆起などがいたる所で見られ、通行に支障をきたした
[3月23日 撮影]

写真 2-70
隆起したマンホール
[3月 19日 撮影]

3月15日主なタイムライン

6時10分頃	福島第一原発4号機で大きな衝撃音が発生し、原子炉建屋屋根付近の損傷を発見
9時25分	広域消防本部より各消防署への連絡として屋内待機
10時10分	自衛隊捜索開始
11時00分	福島原発の半径20～30㎞圏内の住民へ屋内退避指示
11時32分	分署より、消防本部から原発の爆発により30㎞圏内屋内待避との連絡有り

自衛隊による本格的な捜索

捜索4日目となり、自衛隊による捜索活動は本格化し、50名から170名と増員され、翌日以降も200名体制となりました。この自衛隊の宿泊拠点として総合体育館が使われ、それにともない避難所は保健センター、新地小学校、福田小学校、尚英中学校、駒ケ嶺公民館の5カ所に地区ごとに編成されました。また、自衛隊による給水支援（4月15日まで実施）が始まりました。

一方、原発事故により拡散した放射性物質は、風向きによって原発から北西方向へと飛散しました。15日時点での新地町における放射線測定値は0・9マイクロシーベルト／時を記録しました。

6時10分頃、定期検査で停止中だった4号機の建屋が爆発、7時過ぎには2号機でも爆発が確認され、放射性物質拡散の不安が高まりました。捜索活動にも影響し、一時屋内待機命令が出るなど捜索が中断されました。

燃料不足は依然として深刻で、自主避難するにもガソリンがなく逃げられないとの声も聞かれ、放射能の影響を心配する町民の不安も高まりました。

震災の記憶　あの日、あの時

復興支援に感謝の気持を

語り部
小野トメヨさん（中島）

家も車もすべて流され、正直自宅まで津波が来るなんて全然考えていませんでした。大地震の後は津波が必ず来るから、すぐに逃げるということを教えていかなければならないと思います。新地では今までそういう教えはなかったですから。以前は仮設住宅にいましたが、茶碗から箸、電化製品まで全部そろえてくれて。親切な心が身にしみて、ありがたくて涙なしでは語れません。自衛隊の方にも感謝したい。一般の人にあんな大変な仕事できません。あのガレキの山をこんなにきちんと片付けられません、本当に。自衛隊の方々がお帰りになる時は、町民として感謝の気持ちを表すために手を振って見送りました。昔語りをする時はその活躍も付け加えて、決して忘れないようにしないといけません。

［ 県指定史跡　観海堂（かんかいどう）の被災状況 ］

写真 2-71　震災以前の観海堂
「観海堂」は明治５年、学校制度についての法律が頒布される直前に開校した、福島県内で最も古い学校、県指定史跡。津波により基礎部分のみを残し流失した

写真 2-72　地震直後の様子。壁の亀裂などが確認できる

写真 2-73　津波により被災した観海堂の一部

写真 2-74　建物は流失し、基礎部分のみが残った

平成23年

3月16日（水）

行方不明者の捜索が続く 原発4号機で火災発生

自衛隊による行方不明者の捜索活動が続きます。早朝、災害対策本部会議で打ち合わせをし、各機関と連携をとりながら現場作業に入りました。一方、避難生活で体調を崩す人も増え始め、医療体制の整備も課題となりました。原発4号機では火災が発生、不安な日々が続きます。

写真 2-75（上）76（右下）
連日朝から続けられる
捜索活動
自衛隊、緊急消防援助隊、町消防団などにより規模を拡大し行われた

写真 2-77
家財道具や、家族の大切な思い出の品が流失

3月16日主なタイムライン

8時00分	自衛隊捜索活動開始
8時40分	広域消防（神戸4人岐阜県79人・広域4人・消防団1人）→福田地区へ
12時26分	町ホームページ伝言板を使用し、救援物資の呼びかけを行う

2か月におよぶ行方不明者捜索

行方不明者の捜索活動は、自衛隊200名に加えて、神戸市、岐阜県、滋賀県からの緊急消防援助隊約450名も加わり、規模を拡大して行われました。町消防団は、主に遺体搬送の役目を担いました。

行方不明者の捜索活動は5月8日まで約2か月におよび続けられました。この間、4月30日と5月1日には一斉捜索が実施され、自衛隊や警察、消防が1m間隔で並んで捜索しました。

家屋や車両、倒木などの巨大な流失物は、重機による撤去作業を行い、それにともなうガレキの撤去は、町内の建設業関係者の協力を得て、ダンプなどで運搬しました。

捜索活動で発見された遺体は、町内の施設に搬送された後、相馬市内の遺体安置所に移されました。

また、捜索活動とあわせ、金庫や財布、アルバムなどの漂流物の回収や、盗難・空き巣など防犯パトロールも行われました。

福島第一原発事故による影響の情報が錯綜するなか、自衛隊による行方不明者の捜索をはじめ、ガレキの撤去、さらには避難所への炊き出しや慰問活動など、その献身的な活動は町民を大いに勇気づけました。

6月13日の自衛隊の撤退時には、多くの町民が沿道に駆けつけ、「ありがとう」との感謝の気持ちで見送りました。

写真 2-78　流失した線路がめくれあがっている

写真 2-79　重機で大きなガレキを撤去

写真 2-80　打ち合わせをする自衛隊と町職員

写真 2-81　田畑に流れ込んだガレキ

震災の記憶　あの日、あの時

地域の交流を

菅野エイ子さん（岡）

震災でも自宅は大丈夫だったので、ご飯を炊いて、おにぎりにして避難所に持って行きました。一回で24～25個作れるけど、みんな空腹ですぐになくなる。それでまた家に戻ってご飯を炊いて、それを3日間続けてやりました。母親が居る新地ホームでも1日2食しか食べられないというので、新地ホームにも何回か届けました。避難所の皆さんは、すごく寒い思いをしているので、マットレスとか綿入れとか、車に詰められるだけ詰めて体育館に持って行きました。みんな震えててね、可哀想で…。

今は仮設住宅を回ってゲートボールなどに誘っています。家にいると退屈で何もしませんからね。みんなで誘い合って、なんでもいいから楽しみを作ってもらえるといいと思います。

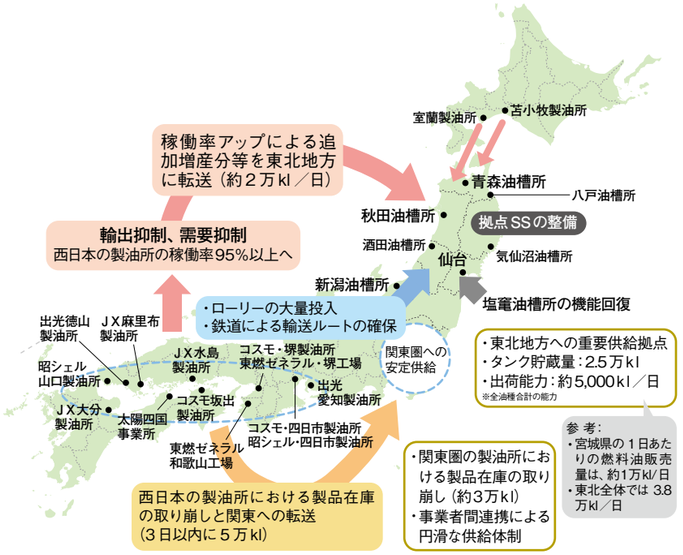
平成23年

3月17日（木）

高まる原発事故への不安 燃料不足がいっそう深刻に

原発事故を受けて避難者の移動が増加し、ガソリン不足はより深刻になりました。あわせて、町民の生活必需品の確保も困難となり、町では、国や県のガソリン等の物資支援を要望し、事態の改善を図りました。一方、悪化の一途をたどる原発事故では、冷却のための放水が始まりました。

写真 2-82　釣師地区



図表 2-3　被災地及び関東圏でのガソリン・軽油等の供給確保
緊急の供給確保措置と拡大輸送ルートの設定　［資料:平成 23 年 3月17日政府発表資料］

3月17日主なタイムライン

11時30分	水道企業団より圧を上げて沢口等に通水
13時20分	県で応急仮設住宅の調査に来町
13時40分	消防が作業開始（福田・埒浜地区）
14時00分	自衛隊からの救援物資到着
14時10分	岐阜県緊急援助隊到着
16時00分	国土交通省からガソリン・軽油到着
17時00分	県から救援物資到着
19時00分	原発に関しての避難の問い合わせ増加

助け合いながら避難所生活

震災直後の大混乱から少しは落ち着きを取り戻しつつあるとはいえ、避難所生活が長引くにつれ、辛いものとなります。家族や知人を失った悲しみ、将来への不安、プライバシーのない、ストレスのたまる環境により、体調を崩したり、いらだちを隠せない人も多くいました。

そんな過酷な状況下でしたが、どの避難所でも避難した人同士で助け合いながら生活をしました。早い段階で地域コミュニティごとに避難所を編成したこともあり、震災以前の人と人との繋がりを維持した生活をすることができました。炊事・トイレ・掃除・物資の運搬などを交代、分担して行い、ゴミ出し、片付けなどのルールを守り、生活を続けました。時間が経過するにつれ、お互いが苦労しながら協力し合うことで団結力が強まったといいます。

こうして3月11日から始まった避難所生活は、仮設住宅への入居などで、6月19日の駒ケ嶺公民館避難所の閉鎖まで約3か月間続きました。移転の際、高齢者世帯からは「さみしくなる」との声もあり、仮設住宅入居後のケアについても考えられました。

震災の記憶　あの日、あの時

子どもたちの心を守る

新地保育所　所長
早見礼子さん

地震後すぐ、保育所の庭に子どもたちを避難させましたが、だれ一人泣く子はいませんでした。救急車は鳴る、サイレンは鳴る、防災無線は鳴る…。あまりの恐怖というか、ただならぬ状況を察して、何かあれば泣く子たちが、そのときはひたすらじっと耐えていました。

すぐに高台にある中学校に避難させましたが、早く親御さんに引き渡したいという思いでいっぱいでした。なかなか連絡のとれない親御さんもいて、最後の一人を親御さんの元に返せたのは 23 時半でした。さらに当日休んだ子どもの無事の確認を取るのに丸２日間。全員無事を確認してほっとしました。

全国から救援物資だけでなく、心のケアの支援もいただきました。震災は大変でしたが国際援助機関のイスラエイドなど、震災で出会えた方々もたくさんいます。本当にありがたいことです。

保育所の再開後は、子どもたちが毎日無事に過ごせること、しばらくはそのことしか頭にありませんでした。常に避難の方法を考えています。

今一番の願いは、この子たちが大きくなったとき、心に傷を負わないでいけたらいいなということです。それは、震災を忘れることではなくて、また思い出しても深い傷にならないようにケアをしていきたいと思っています。

写真 2-83　ガレキを撤去し、通路を確保（釣師）

写真 2-84　流失した車両

写真 2-85　町役場側から見た沿岸部

[助けあい]

全国から届く想い

震災後、町民助け合い運動をはじめ、全国各地から駆けつけた多くのボランティアの方々が新地町の支援にあたりました。4月には新地町災害ボランティアセンターが開設され、被災家屋でのガレキの撤去や清掃作業、そして全国から寄せられた救援物資の運搬・仕分け作業など、様々な作業を行いました。

ボランティアの方々には、気持ちよく活動してもらうことで新地を好きになっていただき、リピーターが一人でも多く増えるようスタッフ皆で心掛けました。

新地町災害ボランティアセンターの挨拶は、ボランティアが帰るときは、「ありがとうございました。また来てください。いってらっしゃい」。リピーターには、「お帰りなさい、おはようございます」と迎えました。その甲斐あってリピーターが増え、快く何度も活動していただきました。

町の義援金受付口座には全国から多額の善意が寄せられ、着の身着のまま避難した町民の当面の生活資金や住宅再建のための資金などとして分配されました。

■ 支援スタッフの活動者数

団体名等	スタッフ数	延人数
福島県社協、県内社協	23 名	182 名
災害ボランティア活動支援プロジェクト会議	22 名	198 名
北海道ブロック社協	12 名	97 名
九州ブロック　社協	34 名	121 名
関東ブロック社協 B	56 名	321 名
連合	94 名	381 名
日本 YWCA	33 名	256 名
個人協力スタッフ	8 名	295 名
新地町ボランティア連絡協議会	34 名	326 名
合　計	316 名	2,177 名

新地町災害ボランティアセンターの立ち上げ

震災発生前の新地町は、『災害のない 安心 安全で海のある 緑豊かな住みよい町』のキャッチフレーズで全国に紹介していた。これまで大きな災害はなかったためボランティアセンターはなく、初めての立ち上げとなった。

まず、町民助け合い運動として、行政が中心となりボランティアの受付・調整を実施。役場庁舎1階で受付し、保育士、町民ボランティアが担当して行った。作業は、町内･全国から寄せられた救援物資の仕分け、倉庫搬入や、写真・思い出の品の洗浄などを行った。

3月下旬、新地町災害ボランティアセンター準備室を保健センター休憩室に立ち上げた。福島県社協、全国社協、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議主導のもと、新地町社協、新地町がアドバイスを受けて開設準備を始め、平成23年4月21日にボランティアセンターが開設された。

写真 2-86　到着した救援物資

3月18日

救援物資が次々と運び込まれる

深刻な物資不足が続いていたが、食料や水、粉ミルク、オムツ、医薬品等の物資が続々と届き始めた。

写真 2-87　役場内に運び込まれる物資

写真 2-88
津波被害地区の
重機による整備

写真 2-89　砂子田川に流入したガレキを撤去する自衛隊

3月19日

防災行政無線で災害対応状況を放送

3 月 19 日～ 7 月 10 日に渡り、防災行政無線で町長による災害対応の状況を伝える放送が実施された。

写真 2-90　放射線量測定（役場駐車場）

■ 放射線量測定結果（3月19日～24日）

測定日	測定値（マイクロシーベルト /h）	
	午前	午後
3月19日	–	0.91
3月20日	0.72	0.74
3月21日	–	0.72
3月22日	0.64	0.67
3月23日	0.66	0.65
3月24日	0.54	0.64

（測定場所：役場駐車場）

放射線量を測定し、測定結果を情報発信

「放射能がどうなっているのかわからず不安」との声を受け、役場駐車場で放射線量を測定し、町のホームページに掲載を開始

■ 水道の復旧状況

3月14日	30%	（駒ケ嶺国道上）
3月17日	60%	（福田、山手方面）
3月20日	70%	（駒ケ嶺国道下、新地国道上）
3月30日	90%	（藤崎、今泉、小川、木崎）
4月15日	100%	（大戸浜、中島）

3月20日

水道の復旧状況が70%に

地震当日に新地町全域で断水していたが、20 日時点で復旧率 70%に。4 月 15 日には全域で通水し、約一か月で復旧完了した。

写真 2-91（上）92（右）
津波の直撃を受けた
新地浄化センター

震災の記憶　あの日、あの時

さよならは言わない

元新地町災害ボランティアセンター長
小泉修平さん（新地町）

震災後の４月 21 日、新地町災害ボランティアセンターを立ち上げ、活動を始めました。プレハブの事務所、テントを張っての開設でした。災害支援プロジェクト会議や全国社協、県社協をはじめ、北海道から沖縄まで全国各地から協力・支援をいただきました。ピーク時には一日 300 名のボランティアが全国から来てくれ、登録者数は約 6000 名にものぼりました。その中の半数近くがリピーターです。

あのガレキの山を見た時、片づくまで何年かかるだろう、２年、３年かな、と思っていたんですが、６月には大型ガレキの撤去が終わり、８月にはボランティアのニーズもなくなりました。約４か月でセンターの活動は収束。予想以上の早さでした。10 月にはサポートセンターができて、現在は仮設住宅のケアをしています。

新地町災害ボランティアセンタースタッフ

ボランティアの方からは「お手伝いに来たけれど、逆に新地町からパワーをもらった」という声を多くいただきました。センターでの挨拶は「ありがとう」「いってらっしゃい」「おかえりなさい」で、「さよなら」は言わないと決めてやってきました。震災から立ち上がるために、みんな生き生きと活動してくれました。

現在は、講演を頼まれて話をしたりもしています。首都圏と田舎では災害時の対応については全然違う、という話など、あの経験から学んだことを多くの人に伝えるために機会があれば話をしていきたいと思います。

3月21日

避難所以外の物資不足の解消へ

避難所以外の住民から物資が不足しているとの声が多数あり、在宅住民に対する米や水などの食料配給が始まった。

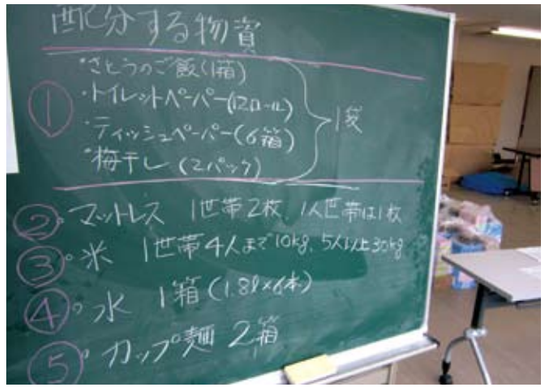


写真 2-93　在宅住民への物資配布

写真 2-95
全国から届けられた救援物資

写真 2-94　自衛隊による給水支援

3月22日

しんちゃん GO の運行始まる

住民の足となっていた乗り合いタクシー しんちゃん GO が新地小～公立病院の間で運行再開。4 月 12 日から通常運行となった。

写真 2-97　小川踏切

写真 2-96　流失したレールの切断と撤去

写真 2-98
ガレキを取り除き、作業用の道を確保

写真 2-99
津波により分断された道路（今泉地区）

写真 2-100
重機を使ったガレキ除去

3月23日

懸命の捜索活動が続く

自衛隊、消防、警察機関などによる行方不明者の捜索をはじめとして、道路復旧、排水、ガレキの除去などの活動が続けられた。

食品の摂取制限及び出荷制限

福島県産の野菜から規制値を超える放射性物質が検出されたことを受け、「原子力災害特別措置法」に基づき、福島県産のホウレンソウ、キャベツ、コマツナなどの葉物野菜の摂取制限、及びブロッコリー、カリフラワーなどの出荷制限が発令された。

3月24日

避難所で慰問演奏を行う

被災者を激励しようと相馬東高校ブラスバンド部が福田小、尚英中、新地小、保健センターの避難所を巡回し、慰問演奏を行った。

写真 2-101　相馬東高校ブラスバンド部、避難所を回り慰問演奏

写真 2-103　道路と歩道にできた溝

写真 2-102
避難所の物資
何がどこにあるかが整然と振り分けられた

3月25日

災害対策本部会議を毎朝開き、復旧作業を推進

毎朝、各機関の代表者による災害対策本部会議を開催。当日の状況報告、作業計画を確認し現地作業にあたり、復旧作業を進めた。

写真 2-104　災害対策本部会議

写真 2-105
小川踏切から見た線路。めくれ上がってしまっている

写真 2-106　釣師浜漁港

3月26日

避難所などで自衛隊音楽隊の慰問演奏

震災後、久しぶりに町に溢れた音楽は、暗くなりがちだった心に響き、温かく町民に寄り添った。町民も大きな拍手で応えた。

写真 2-109　自民党 衆議院議員安倍晋三氏・参議院議員世耕弘成氏来庁

写真 2-107（上）
写真 2-108（下）
自衛隊音楽隊による慰問演奏。各避難所を巡回した

3月27日

新地駅前に撤去したガレキ集積場

新地駅前は震災前、土地区画整理事業の予定地となっていたため、そこにガレキを仮置きすることができ、比較的早くガレキの撤去が進んだ。

写真 2-110　新地駅前集積場

震災の記憶　あの日、あの時

震災後初めての出生届

櫻井伸彦さん・由香さん（新町）

３月に３人目のお産を控え、南相馬市内の病院で出産する予定でした。３月 11 日はお腹が痛かったので、夫が運転する車で南相馬市の病院に行っていました。そこで地震にあいました。保育所にいる２人の子どもたちが心配で、家に帰ろうとしましたが、道路が渋滞しており、帰宅するのに１時間以上かかりました。原発事故のこともあり、親戚がいる茨城県に避難しようとしましたが、その途中の車内で破水してしまいました。慌てて引き返し、南相馬市内のかかりつけの病院に行こうとしましたが休診で、相馬市内の病院で出産しました。

★櫻井伸彦さん・由香さんご夫婦が提出された三男・瑠唯くんの出生届は、震災後初めての届けとなりました。

3月28日

仮設住宅の本格着工、町民助け合い運動

仮設住宅の建設が本格化。また、多くの町民のボランティアにより、救援物資の運搬や漂流物の整理、ガレキの撤去作業などを行った。

写真 2-111　流失写真の整理・保管（旧役場庁舎車庫）

写真 2-113　避難所の食事準備
避難所の食事のほとんどが救援物資でまかなわれた

写真 2-112
一枚一枚丁寧に手作業で汚れを落とす

平成23年

新地町思い出倉庫
ーみなさまの思い出おあずかりしてますー

旧役場庁舎車庫を利用した「新地町思い出倉庫」は、津波により流失した写真やアルバムの清掃ボランティアの作業場となった。流失物の中でも、写真やアルバムは、お金では買えない貴重な思い出の品である。回収された写真は、旧役場庁舎の車庫棟内で、きれいに洗い、状態を回復させ、持ち主の被災者へ返している。こうした一枚一枚の地道な作業により、思い出の品々が、被災者のもとへ戻っていった。

［手順］

やわらかいハケで汚れを落とす → きれいな水でやさしく洗う → 風通しの良い場所で干す

3月29日
電気の早期回復へ 全力の復旧活動

電柱・電線の多くが倒壊・流失し電力供給も一時停止していたが、全力の復旧活動により4月19日には町内全域で開通した。

写真 2-114　水没車両の引き上げ作業

■ 電気の復旧状況

3月31日	90%	（今泉）
4月19日	100%	（作田）

写真 2-115　避難所でタブレット端末を使って遊ぶ子どもたち（新地小）

写真 2-116
避難者の食堂として利用された観海ホール（新地小）

3月30日
保育所満了証書の授与式

30・31日の両日、新地・福田・駒ケ嶺の町内3保育所の満了証書、アルバムの交付が行われた。

写真 2-117　震災の影響で遅れていた保育所の満了式

写真 2-118（右）119（左）
保育証書を受け取り、笑顔を見せる子どもたち

震災の記憶　あの日、あの時

ボランティアの受入体制

鈴木壽子さん（藤崎）

震災数日後、防犯を考え避難生活から自宅に戻りました。電気、水道はありませんでしたがガスと灯油は多少ありました。何より家族でいられることに感謝し、今できることをやろうと決め、まずは避難所になっている小学校で夫と息子はテレビの設置作業に動きました。避難所では役場の職員の方々が大きな悲しみの中、忙しく職務にあたっていました。食事作りが、地区ごとに分担され淡々とおこなわれており、私も、絵本、折り紙、お手玉を持って避難所を歩きました。しかし、原発避難で子どもたちの姿が少ないことに悲しい思いをしました。また、日本各地から駆けつけてくれたボランティアの方々の支援が、何より大変有り難く、同時に混乱の中、ボランティアの受け入れ体制の重要性を強く感じました。

3月31日
24時間体制で 避難所救護センター

役場1階会議室に設置されていた仮設診療所を26日より「避難所救護センター」とし、避難所の健康相談や、医師による診察が5月31日まで行われた。

写真 2-120　救護センターでの診察
医療が身近にあるということは、避難者を安心させた

[桜咲く]

春は必ずやってくる

どんなに悲しいこと、辛いことがあっても、明るい季節は巡ってきます。
震災の影響で入所式、入学式の中止を余儀なくされた教育施設や学校行事についても、懸命な復旧作業のおかげで徐々に日常を取り戻していきました。

新地町少年の主張大会

7月に尚英中学校で開催された「少年の主張大会」では、過酷な体験から学んだことを未来への糧とする決意が次々と発表されました。

打ちひしがれた大人たちにとって子どもたちの輝く笑顔は、ふるさとの復興へ向けて前を向き、立ち上がるためのパワーの源になりました。

4月1日
新年度がスタート

写真 2-122　「小春日和」による炊き出し（新地ホーム）

写真 2-121　役場新採用職員辞令交付式

4月2日
ボランティア活動が活発に

写真 2-124　子どもたちのボランティアに癒された

写真 2-123　尚英中剣道クラブによる肩もみボランティア
避難所での肩もみやマッサージのボランティアを行った

4月4日
釣師地区で火災発生

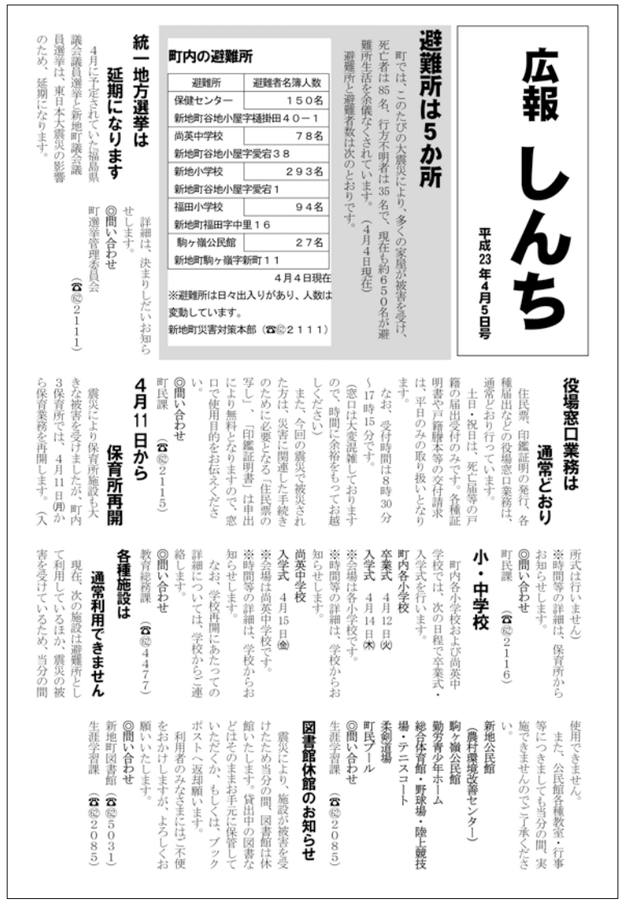
写真 2-126　運び込まれる救援物資
震災から日が経つにつれ必要なものも変化していった

写真 2-125　火災が発生した釣師地区

4月5日
重機を使ってのガレキ処理

写真 2-127　濁川のガレキ撤去

写真 2-128　福島県自民党県議団視察



広報 しんち

平成23年4月5日号

避難所は5か所

町では、このたびの大震災により、多くの家屋が被害を受け、死亡者は85名、行方不明者は35名で、現在も約650名が避難所生活を余儀なくされています。（4月4日現在）

避難所と避難者数は次のとおりです。

町内の避難所

避難所	避難者名簿人数
保健センター	150名
新地町谷地小屋字樋掛田40－1	
尚英中学校	78名
新地町谷地小屋字愛宕38	
新地小学校	293名
新地町谷地小屋字愛宕1	
福田小学校	94名
新地町福田字中里16	
駒ヶ嶺公民館	27名
新地町駒ヶ嶺字新町11	

4月4日現在

※避難所は日々出入りがあり、人数は変動しています。

新地町災害対策本部（☎㊂2111）

統一地方選挙は延期になります

4月に予定されていた福島県議会議員選挙と新地町議会議員選挙は、東日本大震災の影響のため、延期になります。

詳細は、決まりしだいお知らせします。

◎問い合わせ
町選挙管理委員会（☎㊂2111）

役場窓口業務は通常どおり

住民票、印鑑証明の発行、各種届出などの役場窓口業務は、通常どおり行っています。

土日・祝日は、死亡届等の戸籍の届出受付のみです。各種証明書や戸籍謄本等の交付請求は、平日のみの取り扱いとなります。

なお、受付時間は8時30分～17時15分です。

（窓口は大変混雑しておりますので、時間に余裕をもってお越しください）

また、今回の震災で被災された方は、災害に関連した手続きのために必要となる「住民票の写し」、「印鑑証明書」は申出により無料となりますので、窓口で使用目的をお伝えください。

◎問い合わせ
町民課（☎㊂2115）

4月11日から保育所再開

震災により保育所施設も大きな被害を受けましたが、町内3保育所では、4月11日㈪から保育業務を再開します。（入所式は行いません）

※時間等の詳細は、保育所からお知らせします。

◎問い合わせ
町民課（☎㊂2116）

小・中学校

町内各小学校および尚英中学校では、次の日程で卒業式・入学式を行います。

町内各小学校
卒業式　4月12日㈫
入学式　4月14日㈭
※会場は各小学校です。
※時間等の詳細は、学校からお知らせします。

尚英中学校
入学式　4月15日㈮
※会場は尚英中学校です。
※時間等の詳細は、学校からお知らせします。

なお、学校再開にあたっての詳細については、学校から連絡します。

◎問い合わせ
教育総務課（☎㊂4477）

各種施設は通常利用できません

現在、次の施設は避難所として利用しているほか、震災の被害を受けているため、当分の間使用できません。

また、公民館各種教室・行事等につきましても当分の間、実施できませんのでご了承ください。

新地公民館
（農村環境改善センター）
駒ヶ嶺公民館
勤労青少年ホーム
総合体育館・野球場・陸上競技場・テニスコート
柔剣道場
町民プール

◎問い合わせ
生涯学習課（☎㊂2085）

図書館休館のお知らせ

震災により、施設が被害を受けたため当分の間、図書館は休館いたします。貸出中の図書などはそのままお手元に保管していただくか、もしくは、ブックポストへ返却願います。

利用者のみなさまには不便をおかけしますが、よろしくお願いいたします。

◎問い合わせ
新地町図書館（☎㊂5031）
生涯学習課（☎㊂2085）

資料 2-3　広報しんち 4月5日号
震災後最初の発行となった広報しんち。町の状況や被災者支援情報などを伝えた

4月6日
避難所生活を助ける炊き出しと物資支援

写真 2-129　避難所への物資輸送を行う自衛隊

写真 2-130（上）2-131（下）
「嵐の湯」「いっちょう」による炊き出し

4月7日
感染予防のための消毒薬散布を開始／町内全域で震度５の余震発生

写真 2-133　カラーボトル慰問コンサート

写真 2-132　自衛隊による消毒薬散布

4月8日
燃料輸送状況が正常化に向かう

写真 2-134　運び込まれる燃料
震災直後から続いた深刻な燃料不足は徐々に改善されていった

4月9日
新地浄化センター排水作業

写真 2-135　排水作業を行う自衛隊
新地浄化センターは津波により壊滅的な被害を被り、復旧に向けて自衛隊による排水活動が実施された

4月9日
災害見舞金相談窓口開設

写真 2-137　山形いも煮の炊き出し

写真 2-136　災害見舞金相談窓口が開設

4月10日
ふるさとを取り戻す　新地町消防団

写真 2-139　津波により水没した消防車

写真 2-138　避難誘導、捜索活動と町のために尽力した

写真 2-140（上）141（下）　沿岸部の一斉捜索

一日でも早く家族の元に帰してあげたい
―― 新地町消防団

新地町消防団は４分団で、消防団員数 319 名、ポンプ車等 18 台で活動を行っていた。

震災当日、沿岸地区にて「津波が来ますから逃げてください」と避難誘導を行った。前方に津波が見えて引き返し、その後を津波が追ってくるという危険な状態だった。団員も１名避難誘導の際に犠牲になった。

翌日から、自衛隊・警察と連携し、捜索活動が開始された。消防団は全面的に遺体搬送に協力し、自衛隊・警察が遺体を発見すると地図で場所を確認し、出動した。搬送の際は、手を合わせ、黙祷をしてから安置所まで運んだ。行方不明者の捜索は、約２か月間続いた。

平成 26 年３月９日、震災から３年が経過してもなお行方不明となっている方がいる。この日、新地町消防団員と福島県警署員による行方不明者一斉捜索が行われた。「一日でも早く家族の元に帰してあげたい」地元消防団の闘いは続いた。

写真 2-142（左）143（中）144（右）　打ち合わせにより、捜索場所の確認

4月11日
震災から一か月 犠牲者へ黙祷を捧げる

写真 2-145　犠牲者の冥福を祈り黙祷
東日本大震災発生から一か月が経過したこの日、震災により犠牲になられた方々の冥福を祈り、黙祷を捧げた

4月11日
町内の保育所再開

写真 2-146　子どもたちの笑顔が保育所に戻る
町内３つの保育所で保育業務が再開された

震災の記憶　あの日、あの時

やってみよう！ボランティア
（平成23年度 新地町少年の主張大会より）

八巻佳那さん（福田小）

被災地でのボランティア活動をテレビで見て、私もやってみようと思い、新地町のボランティアセンターに登録しました。初めての作業は側溝の泥運びで大変だったけど周りの人からも助けられ、「やってよかった」と思いました。でも「子どもはどうして私だけなのだろう」という疑問が残りました。子どももっと参加していいのでは？と思います。だから、考え方を「子どもだからやらない」から「子どもだからこそやってみる」に変えてみたらどうでしょうか。子どもだからこそできることはたくさんあります。

豊かな自然の新地町、そんな自然を育んでくれた新地町に感謝の気持ちをもって恩返しするチャンスだし、成長できる機会でもあると思います。

写真 2-147
住宅修繕相談
被災した住宅の相談コーナーが開設

4月12日
町内各小学校で卒業式

写真 2-148　福田小学校卒業式
震災の影響により、３月 23 日に予定されていた卒業式は延期となっていた。この日、久しぶりの再会となった児童たちは、新たな旅立ちを誓い合った

4月13日
福島第一原発事故が「レベル７」に

写真 2-149　JR の車両撤去作業を開始

	レベル	具体例
事故	7　深刻な事故	旧ソ連：チェルノブイリ発電所事故（86 年） 日本：福島第一原発事故（2011 年）
事故	6　大事故	
事故	5　広範囲な影響を伴う事故	アメリカ：スリーマイルアイランド発電所事故(79 年)
事故	4　局所的な影響を伴う事故	日本：JCO 臨界事故（99 年）
異常な事象	3　重大な異常事象	日本：東海再処理施設火災爆発事故（97 年）
異常な事象	2　異常事象	日本：美浜発電所２号機蒸気発生器伝熱管損傷事象（91 年）
異常な事象	1　逸脱	日本：「もんじゅ」ナトリウム漏れ事故（95 年） 美浜発電所３号機２次系配管破損事故（2004 年）
未尺満度	0（尺度以下）	

資料 2-4　原子力事故の国際評価と具体例（参考資料：経済産業省ホームページ）

4月14日
小学校・中学校入学式及び始業式

写真 2-150　町内の各小学校・中学校で入学式及び始業式が行われた

4月15日
避難所の食事準備

写真 2-151　役場車庫内で食事の準備が行われた

4月16日
ＩＣＡ文化事業協会より家電搬入

写真 2-152　NPO 法人 ICA 文化事業協会より家電が搬入された

写真 2-153　東大阪青年会議所による炊き出し支援

4月17日
長引く避難所生活をボランティアが支援

写真 2-154　体操で長引く避難所生活の運動不足解消を図った

写真 2-155（上）
吉田貴生さん（藤崎地区出身）による理髪ボランティア
写真 2-156（下）
荒めぐみさん（埒浜地区出身）らによるマッサージ支援

4月19日
各地からの医療支援

写真 2-159　救護所、避難所において医療支援

写真 2-160
新地駅前集積場
車の引き上げと
集積場への搬出

4月18日
浸水河川の防疫消毒作業

写真 2-157　自衛隊による河川の消毒

写真 2-158
遺体安置所
（相馬市）
警察の検視後、歯科医が歯形などを調べ、ご遺族の方の確認により身元確認を行った

東日本大震災 災害対策特別委員会
── 新地町議会

写真 2-161　提案書手渡し
議員の意見を提案書に取りまとめ、復興計画に組み入れるよう、町長に手渡された

新地町議会では、議会と町が一丸となって復旧・復興に取り組むため災害対策特別委員会を立ち上げ、復興に向けた道筋を町に提言・提案してきました。

町の復興とは、全ての町民の希望ある将来像を構築することであり、生活の再建、雇用の確保、常磐線の早期復旧、農・漁業の再生、放射能除染、風評被害の克服など、山積する課題に対し早急に対応する必要があります。

町民が安心して暮らせる町づくりのため、町民の意見に真摯に耳を傾け、これらの課題解決に向けて委員が一丸となり力強く活動しています。

写真 2-162（右）163（中）164（左）　町内における被災状況の現地調査

写真 2-165　震災当時の議会状況

写真 2-166　被災ため池の調査

■ 主な協議内容

第１回	平成 23 年 3 月 23 日	・大震災からの経過報告について
第２回	４ 月 ５ 日	・被災者対策等について
第３回	４ 月 19 日	・新宅地計画等について
第４回	５ 月 ９ 日	・国・県の災害対策の諸取り組み等について
第５回	５ 月 25 日	・復興計画の立ち上げ等について
第６回	７ 月 ５ 日	・福島第一原子力発電所事故収束に向けた道筋の進捗状況等について
第７回	７ 月 22 日	・復興計画の取り組みについて ・JR の取り組みについて ・防虫対策について
第８回	８ 月 11 日	・復興計画について ・町外避難者と受入者の状況について ・被災者支援の状況について ・放射能対策について
第９回	９ 月 １ 日	・復興計画基本構想について

4月21日

新地町災害ボランティアセンター開設

災害ボランティアセンターの活動開始

災害ボランティアセンターの場所は、役場東の駐車場を整地して建設された。災害ボランティア活動支援プロジェクト会議の援助により、高知県から7.5坪のコンテナハウス5棟が設置され、4月21日、新地町災害ボランティアセンターが開設、活動を開始した。

4月～6月のニーズは、主に個人宅のガレキ撤去、清掃、家財の撤去・床下、側溝の泥だし・思い出の品の洗浄作業などで、ニーズとボランティアのマッチング作業を行った。7月から、思い出の品洗浄と側溝泥だしは、行政の緊急雇用による対応に変わった。

写真 2-167　ボランティア受付を一本化へ

4月22日

完成した仮設住宅に家具を設置

写真 2-169　小川公園仮設住宅に家具が設置された

『新地の昔話』が出版

写真 2-168　『新地の昔話』（新地語ってみっ会編）
新地町を舞台にした民話が集録された本が出版された

4月23日

放射線健康リスクに関する講演会

写真 2-171　内閣府特命担当大臣玄葉光一郎衆議院議員視察来庁

写真 2-170　長崎大学 高村昇教授による放射線リスクに関する講演会

4月25日

仮設住宅への入居開始／自衛隊による集中捜索

写真 2-173　鍵の引渡し式

写真 2-172　東北 3 県で集中捜索へ
震災から 46 日が経過したこの日、自衛隊による行方不明者の一斉捜索が行われた

写真 2-175　家財道具の運び込み

写真 2-174　仮設住宅への入居開始
陸上競技場に建設された 44 戸の仮設住宅に、約 120 名が移動

仮設住宅名称	戸数	入居開始日
小川公園(第１期)	48	4月25日入居
小川公園(第２期)	63	5月 3 日入居
広畑	84	5月13日入居
作田	46	5月15日入居
小川北原	23	5月21日入居
新林	58	5月28日入居
前田	68	6月10日入居
すずめ塚	57	6月19日入居
がんご屋	126	8月 7 日入居

仮設住宅への入居

3 月 11 日から始まった避難所生活は、6 月 19 日の駒ケ嶺公民館避難所の閉鎖まで続いた。町では震災後すぐに用地を確保し、仮設住宅の建設が始まった。用地は町有地だけでは足りず、地域の方々のご協力により私有地の提供も受けた。

震災前の生活環境に近い状態を確保するため、コミュニティの維持を重要と考えた。そのため、町内 8 カ所に建設する仮設住宅は、基本的には地区ごとのまとまり。まず最初に完成したのは、小川公園仮設住宅。4 月 25 日には第 1 期の 48 戸、5 月 3 日には第 2 期の 63 戸が入居した。6 月末時点では、7 カ所 447 戸が完成し、仮設住宅での生活を始めている。最終的に、町内に 573 戸の仮設住宅が完成した。

4月26日
ボランティア活動が活発に

写真 2-176　被災家屋での排泥やガレキの撤去

連休に合わせ、大勢のボランティアが訪れる

５月の連休及び６月の土日は、福島県社協と共同で福島駅からボランティアバスを運行した。経団連のボランティアバスも東京から運行していただいた。町内各地でボランティア活動を行ったことで、活動をはじめた当初は「何をお願い出来るか分からない」と遠慮がちだった町民から、新規ニーズの申し込みがたくさん上がってきた。平日のボランティア数は個人・団体含め平均約50名。週末は100～150名ほど。300名を超えた日もあった。町民からは感謝の言葉がたくさん聞かれ、ボランティアとの会話もはずんでいた。

写真 2-178　堤防が損壊した釣師浜

写真 2-177　県内外からボランティアが駆けつけた

4月27日
議会・区長会に被災状況を説明

写真 2-180　チューリップが見頃に
新地城址会　チューリップ祭は震災の影響で中止となったが、チューリップ園は例年通りオープン

写真 2-179　会議にて被災状況を説明

4月28日
児童館が再開／役場にて無料法律相談所開設

写真 2-182　仮設住宅の造成工事（前田）

写真 2-181　児童館が再開され子どもたちが集う

4月29日
自衛隊ヘリコプターによる災害状況調査

写真 2-184　新地高校から沿岸部側

写真 2-183　漁港周辺のガレキ撤去が進む

4月30日
避難所でさとう宗幸さん慰問コンサート

写真 2-186　来庁したさとう氏に被害状況の説明を行った

写真 2-185　さとう宗幸さん慰問コンサート
町内の各避難所を訪れ、歌で避難者を激励した

[ありがとう]

心からの感謝を込めて

町内に駐留した自衛隊は、岡山県の第 13 特科隊や福岡県の第 2 施設群などで、
総合体育館・役場などに拠点を設けて救援活動にあたりました。
自衛隊の皆さんには捜索・復旧作業のみならず、避難所での炊き出しも行っていただき、
多くの町民に生きる希望と勇気を与えてくれました。

震災翌日から町職員、町消防団はもとより、警察、消防、自衛隊、さらには町内の建設業者の協力も得て、行方不明者の捜索活動が始まりました。

自衛隊による避難所での炊き出しでは、温かいご飯やおかずが供給され、避難所で喜ばれました。これらの材料となったのは、町内をはじめ、全国各地の皆さんからいただいた救援物資がほとんどです。

海水の引かない水田や折り重なるガレキをかき分けながら連日続いた救出作業は、困難を極めました。

自衛隊第 13 特科隊と第 2 施設群のみなさんが町内から撤収される際には、感謝の気持ちを伝えようと多くの町民が沿道で見送りました。

5月11日
震災から２か月が経過

写真 2-188　震災から２か月が経過した町内

5月9日
学校施設状況調査

写真 2-187　町内の学校施設の被災状況を調査

5月22日
町内農地の約４割が被害

写真 2-190　津波による塩害などをこうむった被災農地

5月18日
仮設住宅の建設が進む

写真 2-189　仮設住宅建設

6月1日
世界最大級のオルゴール＆野外バレエ

写真 2-192　清里フィールドバレエによる慰問公演

5月24日
農地のガレキ撤去

写真 2-191　大量のガレキが流入した農地

6月8日
和太鼓の音が鳴り響く　瑞宝太鼓

写真 2-193　長崎県雲仙市『瑞宝太鼓』による慰問演奏

6月8日
公益財団法人 日本相撲協会 慰問相撲

写真 2-194　横綱 白鵬による土俵入り
ちゃんこ鍋の炊き出しや力士とのふれあいなども行った

6月10日
救援物資分配

写真 2-195　在宅の町民への救援物資分配

震災の記憶　あの日、あの時

今、わたしにできること
（平成23年度 新地町少年の主張大会より）

菅野彩織さん（新地小）

校長先生から「震災の体験を記録に残しては」という提案があり、６年生の私たちが総合的な学習の時間で取り組むことになりました。私たちのグループは、町の被害状況や復興への取り組みなどを担当。復興現場の生の声を聞くため、自衛隊や役場の方にも取材しました。その際「子どもたちの頑張りが町の復興につながる」「全国から多くの人たちが支援してくれている。感謝の気持ちを忘れないように」との話を伺い、改めて全国から温かい支援の手が届いていることに気づきました。この震災の記録が完成しても、今の状況が良くなるわけではありません。でも、納得するまでやり通したい。今、自分にできることを頑張ることが、新地町の復興にもつながると考えます。

6月13日
自衛隊撤退

写真 2-196　自衛隊第 13 特科隊が撤退
多くの町民が沿道で手を振り、感謝の気持ちで見送った

写真 2-197
自衛隊による震災後の救援活動に、多くの勇気をいただいた

6月18日
仮設住宅に花を寄贈

写真 2-198　第十三行政区より新林仮設住宅に花が贈られた

6月19日
東日本大震災 新地町合同慰霊祭

写真 2-199　震災で犠牲になられた方々へ祈りを捧げる
遺族をはじめ町関係者や町消防団員など約 1,200 人が参列した

6月26日
新地高校ボランティア

写真 2-200　ボランティア活動を行った新地高校の生徒
小川地区の側溝の泥だしや子供たちとの交流などを行った

6月27日
移動図書館が仮設住宅を巡回

写真 2-201　仮設住宅移動図書館

7月4日
町内に掲げられたメッセージ

写真 2-202　町内各所に掲げられた感謝のメッセージ

7月10日
町長による防災無線

写真 2-203　町長による災害対応状況を伝える防災無線
3 月 19 日からこの日まで一日もかかさず毎朝実施された

7月13日
第 1 回 復興計画策定委員会

写真 2-204　新地町復興計画の策定
町民アンケートや懇談会など、町民の意見を聞きながら進行

7月13日
臨時図書館が開館

写真 2-205　図書館 2 階の視聴覚室で貸し出しを再開

7月15日
新地町少年の主張大会

写真 2-206　町内 3 小学校と尚英中学校から 10 名が発表

7月24日
復興支援 スイス音楽祭

写真 2-207　全国のアルプホルン同好会が震災復興支援

8月6日
なんだかんだ言ったってやるしかねぇべ祭

写真 2-208　復興への大きな一歩を踏みだす祭り
商工会青年部のみなさんが、町を活気づけようと企画された
（新地町総合公園内こどもの森）

8月8日
第 2 回 復興計画策定委員会

写真 2-209　被災地区の再生について意見交換
被災地区の再生と土地利用について案を提示し意見交換

8月13日
大戸緑地広場 東日本大震災慰霊盆踊り大会

写真 2-210　伝統の盆踊りに家族を連れて大戸浜に
灯ろうが並べられ、震災の犠牲になった方々の冥福を祈った

災害ボランティア活動収束へ

新地町災害ボランティアセンターは、平成 23 年 8 月 10 日「しんち町生活支援ボランティアセンター」へ名称変更となった。それまでの災害ボランティア活動から、仮設住宅でのサロン、炊き出し、イベント等、仮設住宅の生活支援を行うこととなった。同年 10 月には事務所を社会福祉協議会に移転した。

■ 災害ボランティアの活動実績（平成 23 年 8 月 31 日まで）

個人受付	3,628 名
団体受付	2,460 名
受付総数	6,088 名

8月16日
めざましテレビ Tatton プロジェクト

写真 2-211　塩害を受けた田んぼに植えられた綿花
『めざましテレビ』が開始した除塩効果があるという綿花を植え、海水に浸った田んぼを再生させるプロジェクト（Tatton ＝田んぼとコットンを合わせた言葉）

8月23日
人形劇で子どもたちも笑顔に　劇団銅鑼（どら）

写真 2-212　東京都を中心に活躍する劇団銅鑼のみなさん
駒ケ嶺保育所で人形劇などを披露し子どもたちを楽しませた

8月27日
新地の海を取り戻す　漁師の結束

写真 2-213　海底に沈んだガレキ撤去を行う漁師たち
再利用が可能な漁具は、岩手県内で漁業が再開した港へ提供

8月29日
パノス・カランさん ピアノコンサート

写真 2-214　世界共通の音楽で希望を（尚英中学校）

9月6日
「しんちゃん GO」仮設停留所

写真 2-216　のりあいタクシー「しんちゃん GO」停留所

8月30日
仮設店舗が完成

写真 2-215　谷地小屋地区仮設店舗

震災の記憶　あの日、あの時

活気ある新地へ

元商工会青年部部長
佐藤秀史さん（中里）

津波被害にあわれた方々の、防災集団移転団地の水道設備作業のため、毎日忙しくしています。被災した多くの方が自分の家が建つのを心待ちにしています。現場を見学に来て、「ここに我が家ができるんです」と、嬉しそうに話す人たちがいます。それだけ待ち望んでいるんだなあと思うと、一日も早く復旧、復興作業を終えたいと思います。そして新地町がいままで以上に、人が集まり楽しく過ごせる町になればと思います。

震災当初、私は商工会青年部の部長で、失意の町民を元気づけるために何かやるしかねぇべと、「やるしかねえべ祭り」を開きました。「この大変な時期に祭りなんて…」という声もありましたが、開催後には「楽しかったよ」「ありがとう」というたくさんの感謝の言葉を聞いて、やってよかったと思いました。商工会青年部といってもせいぜい 10 人ほど。運営・企画には他の人の協力は欠かせません。企業の協賛金や町の助成などを得てやっと開催できています。２回目・３回目の開催も、若い人たちの協力もあって大成功でした。

今後も新地町が完全に復興するまで、この祭りは続けられればと思っています。そして、町の人を元気にしたい。若い人たちが協力し合い、町を盛り上げていってほしいですね。

防災集団移転団地からの景色
海と人とが共生するまちづくりのため、1 日も早い作業を目指す

町民を元気づけようと開催
第一回　なんだかんだ言ったってやるしかねぇべ祭
震災の影響により「遊海（ゆかい）しんち」が開催できないため、商工会青年部が企画。尚英中学校の生徒による「よさこい演舞」で華やかに祭の幕が開けた

[一歩ずつ]

明日へ向けての歩み

被災された方の仮設住宅への入居など、生活再建へ向けた動きが
緒に就き始めた夏。仮設住宅での盆の迎え火・送り火、盆踊りといった
伝統行事に人々が集う光景も見られました。

町に元気を取り戻そうと新地町商工会青年部主催の「なんだかんだ言ったってやるしかねぇべ祭」といったイベントも賑やかに開催され、震災以降沈んでいた町の空気も、子どもたちの歓声、大人たちの笑顔によって活気が戻り始めました。

そして何より、生まれ育った新地町の復興へ向け、人の輪が、地域の絆が再確認された夏でした。

震災で町の様子は変わってしまいましたが、子どもたちの笑顔は以前と変わらずこの場所にありました。アイラブしんちサークルなど、若手主体のイベントが多く開催され、未来の新地への第一歩が力強く踏みだされました。

9月6日
第３回 復興計画策定委員会

写真 2-217　復興構想、防災集団移転促進等について意見交換

9月13日~16日
第１回 地区別復興懇談会

写真 2-218　４日間にわたって行った地区別復興懇談会
10 月 18 日～ 21 日には第２回懇談会を行い、すまい再建などについて懇談を行った

9月14日
めざましテレビ Tatton プロジェクト

写真 2-219　パティシエの鎧塚俊彦さんらが来町

9月17日
新地町敬老会

写真 2-220　敬老会が行われ、長寿の方を祝福した

9月18日
愛甲猛ベースボールスクール

写真 2-221　元プロ野球選手の愛甲猛さんらが子どもたちに野球指導

9月23日
シチズングループ卓球交流会

写真 2-222　シチズン卓球部のみなさんが新地町で卓球交流会を開催

9月27日
県町 復旧・復興本部合同会議

写真 2-223　福島県と新地町の合同会議
復旧・復興の取り組み状況について意見交換を行った

9月30日
益子直美さんが尚英中を訪問

写真 2-224　元女子バレーボール日本代表の益子直美さんが尚英中の生徒と交流

10月10日
広畑仮設で秋の味覚を収穫

写真 2-225　広畑仮設住宅のみなさんが、サツマイモ掘りを行い親睦を深めた

10月21日
救援物資配分

写真 2-227　冬物の衣類や下着、生活用品などの救援物資を配分

10月14日
サポートセンター「まごころ」開所

写真 2-226　サポートセンター「まごころ」が開所
仮設住宅入居者の生活をサポートする活動を行う

11月6日
新地町復興産業まつり

写真 2-228　産業の復興に向け町に活力を取り戻すイベント

11月29日
仮設店舗での営業開始

写真 2-229　仮設店舗での営業を開始した伊藤水産

12月1日
食品等のスクリーニング検査開始

写真 2-230　食品等の放射能簡易分析装置による検査を開始
検査対象は、自家消費農産物、山菜、キノコ及び井戸水等

12月19日
新地発電所で発電再開　相馬共同火力発電２号機

写真 2-232　発電再開のアナウンスに拍手と歓声があがった

写真 2-231　新地発電所が発電を再開
津波により甚大な被害を受けたが、迅速な復旧工事により再開

写真 2-233
避難したタービン建屋から見た津波

写真 2-234
倒壊した揚運炭機
No.3・4

新地発電所の被害状況および復旧状況

東日本大震災による地震と津波の影響により、相馬共同火力発電（株）新地発電所では発電設備が大きな損傷を受け、1･2 号機とも発電停止という状況になりました。

相馬港 5 号ふ頭では、石炭のコンベアや重油受入配管等が大破し、荷役準備中の石炭船「SHIRAMIZU」が座礁しました。

このような状況にあっても、早期の発電再開を目指し、震災翌日より復旧工事に取り組んできました。これにより、2 号機が平成 23 年 12 月 19 日、1 号機も同年 12 月 27 日に発電を再開し、平成 24 年 3 月 20 日には 1・2 号機とも石炭専焼による定格出力（100 万 kW2 基）での発電が達成されました。

12月4日
消防支援車両配備式

写真 2-235　津波で被災した５台の消防車両は全国各地からの支援により整備された

12月22日
内閣府の環境未来都市に選定

写真 2-236　野田佳彦内閣総理大臣から加藤憲郎町長へ選定証が手渡された

1月1日
希望の一年に　鹿狼山元旦登山

写真 2-237　平成 24 年 鹿狼山元旦登山
多くの登山者が訪れ、町の早期復興を祈願した

1月7日
震災の記憶と昔話を CD に集録

写真 2-238　語り部として活躍している小野トメヨさん
自身が経験した震災と、新地町の昔話を集録した CD を発刊

1月8日
防災の誓い新たに　消防出初式

写真 2-239　新地町消防出初式
消防団員や女性消防隊員など約 300 名が出席。震災活動に対する功績を称え総務大臣表彰が贈られた

1月8日
希望を胸に　新地町成人式

写真 2-240　新成人 110 名が晴れの日を迎えた
出席者全員で震災で犠牲になった方々へ黙祷を捧げた

1月26日
明治大学と復興支援協定を締結

写真 2-242　協定の調印式が明治大学で行われた
人材育成や大学の提案を有効活用し復興につなげる

1月23日
第 7 回 復興計画策定委員会

写真 2-241　新地町復興計画(案)についての意見を町長に提出

2月1日
明治大学生 町の状況について懇談

写真 2-244　公共政策大学院ガバナンス研究科のみなさん

1月27日
ICT 活用発表会

写真 2-243　ICT 活用発表会に全国から約 240 名の教員らが訪れ、授業の様子を視察した（町内 3 小学校）

2月10日
シチズン 楽器贈呈式&記念コンサート

写真 2-246　マーチングドラムやオルガンなどの楽器の寄贈

2月8日
震災後初 大型石炭船が入港

写真 2-245　新地発電所の石炭受入設備の復旧に伴い入港

2月12日
歴史講座 災害の歴史を学ぶ

写真 2-248　東北大学の首藤名誉教授が災害の歴史を語った

2月11日
PHOTOUHOKU による写真撮影

写真 2-247　新たな思い出の写真を撮影
東京などで活躍するカメラマンが子どもたちの写真を撮影した

2月13日
茨城ゴールデンゴールズ　野球道具寄贈

写真 2-250　野球道具の寄贈を受けた尚英中学校野球部、新地ファイターズ、駒ケ嶺バッファローズ

写真 2-249　町役場を訪れた片岡監督と荒選手（新地町出身）

2月20日
太陽光発電設備の設置助成 目録贈呈式

写真 2-252　町内の小中学校へ太陽光発電設備の設置助成が決定
公益財団法人コカ・コーラ教育・環境財団より町に目録が贈呈

2月19日
上を向いて歩こう 大島花子さん来町

写真 2-251　故・坂本九さんの長女、大島花子さんが小川公園仮設住宅を訪問。名曲『上を向いて歩こう』などを披露した

慰霊祭では、加藤町長の「私たちが力をあわせて町を復興させることが、犠牲になられた方々のご遺志にむくいること」という式辞のあと、遺族代表からは「やりきれない思いもあるが、今日を境に、少しずつ日常を取り戻していきたい」とお別れの言葉が述べられました。

[祈り]

あなたを忘れない

あの日、震災により多くのかけがえのない命を失いました。
平成 23 年 6 月、町総合体育館において「東日本大震災新地町合同慰霊祭」が執り行われました。
翌年からは、3 月 11 日にあわせて追悼式が開かれ、犠牲になられた方々のご遺族をはじめ、
町関係者や町消防団員ら多くの人々が参列し、哀悼の意を捧げました。

平成24年

2月21日
3月11日に誕生した命に贈る『希望の君の椅子』

写真 2-254　3月 11 日に誕生した小川地区の目黒春亜ちゃん。地震から約6時間後に相馬市の病院で産声をあげた

写真 2-253　旭川大学大学院教授の磯田憲一さんを中心とするプロジェクトが、3月 11 日に誕生した子どもに贈った

2月26日
復興 生涯学習フェスティバル＆文化祭

写真 2-256　各種教室やクラブ・団体が日ごろの学習成果を発表（農村環境改善センター・保健センター）

2月21日
新地小 6 年生 総合学習で震災の記録

写真 2-255　町の状況を自分たちで調べて発表

2月28日
功労者表彰式

写真 2-258　町の発展に尽力された方々を表彰
平成 23 年度新地町功労者表彰式が行われた

2月28日・3月13日
「放射線と健康について」講演会

写真 2-257　放射線の健康への影響と今後の健康管理を正しく理解するため講演会を開催　（講師：福島県立医科大学 宮崎 真氏）

2月29日
都市再生機構との調印式

写真 2-259　復興まちづくりの推進に向けた覚書を交わし、基本協定を締結した

3月5日
どこにいても新地町を思う会 来庁

写真 2-260　どこにいても新地町を思う会が来庁
現在は新地を離れて生活する新地町出身者で結成されたサークル

3月11日
あの日から 1 年を迎えて　追悼登山

写真 2-261　福島県登山ガイド協会の主催 鹿狼山追悼登山

震災の記憶　あの日、あの時

震災で思ったこと
（平成23年度 新地町少年の主張大会より）

黒沢萌々花さん（尚英中）

今回の震災で学んだことがたくさんあった。一つは、「命というものがどれほど大切であるか」ということ。二つ目は、「感謝の気持ちをきちんと持つ」こと。家事一切を私と弟たちでやり、改めて母の大変さに気づき感謝するきっかけになった。三つ目は、家や電気のありがたさだ。今までどれだけ恵まれたものかを痛感した。だから、電気も水も食べ物も少しも無駄にできないと思う。震災に遭わなければ、何も知らないで過ごしたことだ。

今、私は自分ができることを精一杯したいと思う。水と電気が使えるようになったとき、私がほっとしたように、被災したすべての人がほっとできるように、何でもいいから お手伝いをしたい。新地町の復興のために貢献していきたいと思う。

3月11日
東日本大震災新地町追悼式

写真 2-262　政府主催の追悼式が会場内で放映され、参列者全員で黙祷を捧げ、犠牲者の冥福を祈った

写真 2-263
静岡市清水災害ボランティアネットワークによる竹灯籠

平成24年

3月15日
デューク更家さんウォーキング教室

写真 2-265　新地町総合型地域スポーツクラブ・チャレンジしんち主催「デューク更家ウォーキング教室」

3月14日
南アルプスから御輿寄贈

写真 2-264　山梨県南アルプス市の白根地区郷土史研究部より神輿 2 基が寄贈された

3月18日
絆を深めたさとう宗幸さんコンサート

写真 2-267　しんち未来塾主催『さとう宗幸“絆 2012”コンサート』（総合体育館）

3月16日
保育所除染

写真 2-266　重機で庭の表土を削る作業（駒ケ嶺保育所）

3月29日
コカ・コーラセレモニーへ招待

写真 2-269　招待を受けた尚英中吹奏楽部
公益財団法人コカ・コーラ教育・環境財団の支援で東京へ招待された

3月23日
平成23年度 町内小学校卒業式

写真 2-268　新たな生活に旅立つ児童たち

3月31日
仮設住宅で上方落語　新地寄席

写真 2-270　上方落語「新地寄席」
「いっしょに歩こうプロジェクト」主催　町内仮設住宅などで開催

4月4日
保育所 入所式

写真 2-271　元気な笑顔を見せる子どもたち

4月6日
小・中学校 入学式

写真 2-272　新地小学校入学式

震災の記憶　あの日、あの時

心の復興が一番大事

川上照美さん（釣師）

震災後、ガレキが堆積していた釣師浜海水浴場や砂浜のビーチクリーンをする「しんちビーチク隊」を結成しました。現在、多くの方が海から離れて生活しており、生活の一部だった潮風や浜の香り、波の音は、あの日から消えたままとなっています。以前のような生活を取り戻し、海に戻りたいという思いで活動しています。仕事も、年齢も違う人たちが大勢参加し、町内だけでなく町外の方もいます。震災がなければ会うことがなかっただろう人たちが団結して取り組んでいます。

震災によってみんなが心に傷を負いました。傷を負った私たちが自分の力で一歩を踏み出したこの活動で前向きになることが、心のケアにつながっていると感じています。心の復興が一番大事だと思います。

4月14日
図書館が全面再開

写真 2-273　全面再開した新地町図書館
修復工事と整理作業を終え、新地町図書館が全面再開した

写真 2-274
震災直後の図書館
仮設住宅での移動図書館や、視聴覚室での臨時図書館などを経ての再開となった

4月28日
健康ウォーク「自然の中を歩こう会」

写真 2-275　勤労青少年ホームから真弓清水をめぐる約7.5kmのコースをウォーキング

5月7日
新地小もちつき交流会

写真 2-276　もちつきで地域の交流を図った

5月13日
広畑仮設　保育所・小学校の草刈り

写真 2-277　感謝の気持ちで除草作業に汗を流す
隣接する福田保育所や福田小学校のグラウンドの除草作業

5月19日
坊さんバンド　仮設住宅で演奏

写真 2-278　名古屋市内の寺院などのみなさんが仮設住宅を訪れバンド演奏を披露

5月19日
仮設住宅で元五輪選手と交流

写真 2-279　バレーボール全日本代表として活躍した三屋裕子さんらの指導のもと心身の健康づくりを行った

5月23日
常磐自動車道橋梁名称が決定「新地きずな橋」

写真 2-280　復興への架け橋に「新地きずな橋」
町内の学校から 217 件の応募があり、大堀里桜さん、藤井里音さん、橋本拓海くんの 3 名（同一名称の応募）による「新地きずな橋」が選ばれた

5月25日
東日本大震災 被災地復興祈念植樹

写真 2-281　被災地の復興を祈念した桜の植樹式（総合公園）
この桜の苗木は横浜市南区から贈られ植樹された

6月1日
ICT 環境　情報通信月間総務大臣表彰

写真 2-282　町内小中学校での ICT 機器の活用や、震災における被災情報収集・情報提供の貢献などに表彰

震災の記憶　あの日、あの時

また新地の海で漁を

漁師
荒　敏裕さん（釣師）

地震発生当時は、隣の家で役員会をしていました。家は港から 100 メートル程ですから、地震後、すぐに沖に出すため、船のエンジンをかけて待っていました。そして仲間の船とともに沖に出ました。壁のように押し迫ってくる波をなんとか乗り越えました。

震災後は、海に沈んだガレキ撤去などを行っていました。かつては小女子（こおなご）やシラス漁をしていましたが、今はまだ海に出られない状況です。船は健在で漁具も整ってきて、いつでも漁にでられる状況なのに、とても悔しい思いです。船は私の学校卒業と同時に親が作ってくれたものです。漁師は丘に上がるとすることがない。海で育ち、育てられたし、漁ができない今は海が恋しいですね。津波で甚大な被害を受けましたが、漁師を辞めようとは思いませんでした。海に対する思いは変わりません。この海で頑張りたいし、この海と一緒に復興したい。やらなければいけないと思っています。

現在、県の支援事業で漁法の継承のため将来の担い手を育成する勉強会をしています。漁具のつくり方などを情報交換し、互いに学んでいます。漁に出られないこの機会を大いに利用したいと考えています。漁師も新時代です。若い漁師が中心となって、これからも釣師の名を全国に拡げていきたいと思います。

復旧工事が行われている釣師浜漁港の岸壁に並ぶ漁船
またこの海で漁ができる日のために整備は怠らない

漁の安全を見守る神社

漁の再開を祈って大漁旗が掲げられた

[未来へ]

次代へつなぐ　未来への眼差し

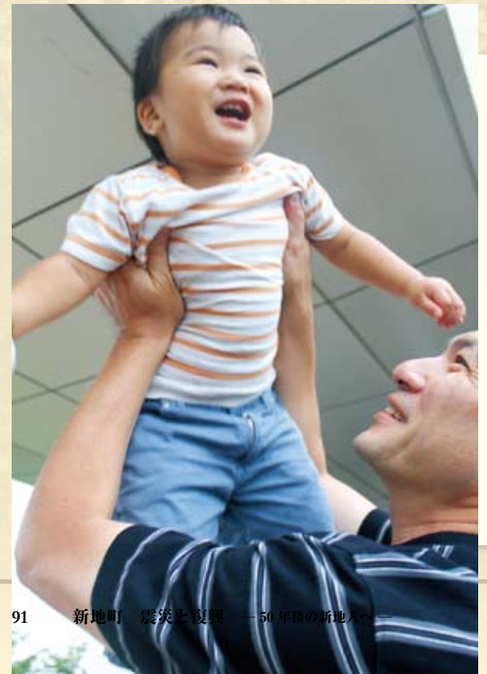
新地町は、震災から立ち上がり、一歩一歩確実に歩んでいます。
平成 24 年 1 月には新地町復興計画が策定され、
現在は計画に基づいて様々な具体的な事業が進められています。
新地町の復興に向け「チームしんち」一丸となり、未来への道を創っていきます。

町の動きと歩を同じくして、国・県の事業も計画され、常磐自動車道や復興支援道路と位置づけられた東北中央自動車道などの建設も進んでいます。

新地町の主要産業である漁業についても、大きな被害を受けた震災直後から漁協を中心に関係者らが結束し、新地の海を取り戻すために日々汗を流しています。

太陽光やバイオマスなど多様な自然再生エネルギーを活用、火力発電とのベストミックスによる低酸素・省エネルギーによる「ハイブリッドな発電のまち」を目指します。

町内の小中学校には、防災機能を備えた太陽光発電や蓄電池を整備し、これからの時代を担う子どもたちに、環境教育を推進します。



震災から立ち上がる新地町への想いを託し
― 土井新智（しんち）くん

九十九里浜を臨む千葉県東金市ですくすくと育っているひとりの男の子がいます。男の子の名前は「新智（しんち）」くん。平成 23 年 6 月、母の恵美子さんが新地町のボランティアに訪れ、町民とふれ合う中で、「どんな逆境からも力強く立ち上がる、大切な仲間を大事にできる子に育って欲しい」との思いから、新智と名付けたそうです。

新智くんの成長と共に、新地町も復興の道を一歩一歩進んでいきます。

6月6日
復興事業推進連絡調整会議

写真 2-283　国（関係省庁）、県、町による連絡調整会議
関係者 40 名以上が出席し、復興事業の迅速かつ円滑な推進を図るため協議、意見交換を行った

6月8日
イスラエイド（IsraAID）来町

写真 2-284　イスラエル国際人道援助フォーラム（IsraAID）
東日本大震災の津波被害による子どもの心のケアを行った

7月9日
福島県生活交通課新地町駐在を開設

写真 2-285　JR 常磐線の一日も早い再開を誓う開設式
常磐線のルート変更や用地取得などの業務にあたる（役場３階に開設）

7月18日
ASIMO 特別授業

写真 2-286　被災地域の小中学生対象の特別授業
「夢見る力と笑顔を」というメッセージを込めて実施

7月18日
ボランティアに訪れた明治大学 学生

写真 2-287　明治大学 学生によるボランティア
夏休み期間を利用して町内でボランティア活動を実施

7月19日
イスラエルから小児科医師や音楽家

写真 2-288　イスラエルからの支援
小児科の医師や音楽家・タッチセラピストの方たちが支援

7月23日
小学校除染

写真 2-289　重機で校庭の表土を削る作業（新地小学校）

7月24日
仮設住宅で運動教室

写真 2-290　健康のための運動教室が開かれた

8月4日
第２回 やるしかねぇべ祭

写真 2-291　商工会青年部主催のやるしかねぇべ祭
町内外から多くの来場者があり、大いに盛り上がった

8月9日
AKIRA 慰問ミニライブ

写真 2-292　AKIRA による慰問ミニライブが開催

8月11日～15日
新地町思い出倉庫

写真 2-293　津波で流失した思い出の品々
場所を役場内に移動してお盆期間に合せて開放

8月13日
仮設住宅で２回目の迎え火

写真 2-294　先祖の霊を家へと導く盆の迎え火
仮設住宅での２度目のお盆。連なった迎え火がゆらめく

8月16日
太田裕美さんミニコンサート

写真 2-295　歌手の太田裕美さんによるミニコンサート（農村環境改善センター）

8月17日
新しいごみ焼却場で火入れ式

写真 2-296　運営の安全を祈願し、焼却炉に火が入る（相馬市光陽）

8月19日
明治大学による復興支援活動

写真 2-297　夏休み科学教室で工作に挑戦
明治大学による復興支援活動の一環（駒ケ嶺小学校）

8月25日
一日限りの小さな町 マイタウンマーケット

写真 2-298　一日限りの小さな町を作るイベント
『マイタウンマーケット』（小川公園仮設住宅）

8月25日
伝統の舞復活　子眉嶺神社

写真 2-299　子眉嶺神社例大祭

8月25日
仮設住宅で交流

写真 2-300　入居者同士の交流を図るイベントを開催

9月9日
太陽光発電システム竣工式

写真 2-301　公益財団法人コカ・コーラ教育・環境財団の助成により、尚英中学校及び町内３小学校に設置された

9月23日
らちはまだいこんの会　いちご植付

写真 2-302　広畑仮設住宅を中心に結成された『らちはまだいこんの会』　健康づくりやメンバー同士の親睦を図る

震災の記憶　あの日、あの時

豊かな農地を後世に残す

農業
目黒文夫さん（富倉）

大津波により、所有する田畑の約9割、約25ヘクタールが被害を受けました。あれから約3年が経ち、農地の復旧も進み、耕作面積は震災前まで戻ってきました。息子が跡を継いでくれるので、来年以降は息子とともに稲作を中心に規模を拡げていきたいと思っています。できれば、震災前以上に大きくしたいですね。

また、会社を辞めて新規に農業をしたいという若者など、これからの農業を担う若い人のためにも人材育成に協力しながら、その牽引役となって頑張っていきたいと思います。しかし町全体をみてみると、JR常磐線や沿岸部の復旧はまだまだこれからですし、被災して自宅や職場を失った方々も多く、先のことはまだまだ分からない状況です。それでも、農業をやる方を多く残したいと思いますし、離農しないで新地町で農業を続けられるよう全力でサポートしたい。地元農業の発展のために尽していきたい、盛り上げていきたいと思っています。

農業は子育てと同じで、作物もかわいいし、愛情を持って育てるとそれに応えてくれます。新地町の緑豊かな農地を残して後世に伝え、昔ながらの田んぼや畑を守りながら、この新地町でやっていきたいと思っています。

被災直後の農地
流れ込んだガレキや、海水による塩害は、新地町の農業に大きな影響を及ぼした

地元農業の発展のため、農地を守る
「新地町の復興には、農業の復興が欠かせない」と話す目黒さん。現在は農地の復旧も進んでいる

平成24年

9月30日
新地町民野球場　ドリームベースボール

写真 2-303　『宝くじスポーツフェア・ドリームベースボール』
元プロ野球選手による野球教室に少年野球チームが参加

10月15日
味の素（株）移動サロン

写真 2-304　味の素（株）による仮設住宅での移動サロン

10月16日
IKEAからの支援　駒ケ嶺保育所

写真 2-305　駒ケ嶺公民館いっぱいに並べられた遊具で大喜び

10月21日
防災への意識高く 防災訓練実施

写真 2-306　消防団秋季演習（駒ケ嶺小学校校庭）

11月1日
読売巨人軍から野球道具寄贈

写真 2-307　プロ野球の読売巨人軍から野球道具が寄贈
町スポ少野球チームの代表に手渡された

11月6日
新地町環境未来都市調査検討委員会

写真 2-308　環境未来都市についての検討
新地町環境未来都市構想の実現に向けた取り組みについて検討を行った

11月11日
新地町復興産業まつり

写真 2-309　しんち未来塾企画の青森ねぶたが町内を練り歩いた

11月15日
伊達開拓でつながる ふるさと従兄弟（い～とこ）サミット

写真 2-310　伊達開拓にゆかりのある５市町が交流する「ふるさと従兄弟（い～とこ）」まちづくりサミット（宮城県亘理町）

11月26日
沖縄から復興を願いシーサー寄贈

写真 2-313　仮設住宅での炊き出しなどの支援をいただいている「YORISOI隊」のみなさん

写真 2-312　沖縄県北中城村（きたなかぐすくそん）から届けられたシーサー

震災の記憶　あの日、あの時

ちょっと立ちどまって
（平成24年度 新地町少年の主張大会より）

林 聖哉さん（尚英中）

原発事故で漏れ出した放射線量の量はどれくらいが危険なのか、新聞やニュースを見ても誰も正解を出さない。震災以後、原発はだめというが、地球温暖化や将来の電力需要を考えると果たしてそれでいいのだろうか。農林水産物の自主規制も厳しくすれば、消費者の信頼を得るのだろうか。

中１の国語教材に「ちょっと立ち止まって」という文章があった。物事に、正解は決して一つではなく、見方、考え方により、全く別の答えとなるというのだ。放射線量の問題も決して正解は一つではないだろう。様々な意見をよく聞き、他の意見に踊らされることなく、自分で判断しなければならない。将来のためにも、立ち止まり、より良い別な見立てをする必要があると思う。

11月25日
宮路オサムさんら来町 歌とトークで新地町を笑顔に

写真 2-311
歌手の宮路オサムさんらによる歌とトークショー（農村環境改善センター）

11月30日
復興 まちづくり懇談会

写真 2-314
復旧・復興事業について説明後、懇談を行った

平成25年

1月1日
鹿狼山元旦登山　朝日に祈る復興

写真 2-315　平成 25 年　鹿狼山元旦登山

1月7日
新たな住宅団地の造成始まる

写真 2-316　造成工事が進む作田東防災集団移転団地

1月13日
平成 25 年 新地町成人式

写真 2-317　新成人 83 名が晴れ姿

1月23日
海岸の復旧工事が始まる

写真 2-318　加藤町長らが着工スイッチを押す
津波被害を受けた木崎地区海岸の復旧工事をスタート

2月4日
被災高齢者共同住宅祈願祭

写真 2-319　建設予定地の小川地区で地鎮の儀

2月14日
JR 常磐線復旧会議

写真 2-320　JR 常磐線移設に係る都市計画決定についての
説明会を開催（農村環境改善センター）

2月20日
仮設焼却炉が稼働　災害廃棄物処理場

写真2-321　災害ガレキ処理のための仮設焼却炉（相馬市光陽）
1 日に約 570 トンのガレキなどが処理できる

2月20日
がんばれ東北　やっぱり民謡

写真 2-322　町内在住の鈴木正夫さんをはじめ福島県ゆか
りのプロ歌手らが歌声を披露

3月9日
新地町消防団員と福島県警署員
行方不明者一斉捜索

写真 2-323　震災による行方不明者の捜索活動
町内の沿岸部で実施され、手がかりの発見などに努めた

震災の記憶　あの日、あの時

正確な情報発信で信頼を

りんご農家
畠　米七さん（岡）

長年苦労し、作ったりんごをすべて自分で売り切れるようになってきたところでの震災でした。震災後は、放射能の影響が心配で、常連のお客さま宛に検査をしたことを記した案内書を送付し注文を取りました。しかし予想通り例年の半分程の注文でした。福島や農家の現状を知ってもらうため、ブログやツイッターでも情報発信に努めました。ツイッターの反響は大きかったですね。たくさんの応援の言葉をいただき、そこから注文してくださった方もいました。新聞にも何度か記事にしてもらい、遠方からの注文が増えました。以前は常においしい農産物をどう作るかを考えていたのに、今は放射能をどうするかが最初にきてしまう、そんな農業になってしまった。早く信頼回復を実現したいですね。

3月11日
震災から２年　復興への誓い新たに
東日本大震災新地町追悼式

写真 2-324　東日本大震災新地町追悼式
震災発生時刻の 14 時 46 分には参列者全員で黙祷を捧げた

写真 2-325
追悼式に寄せられた
メッセージ

3月24日
津波被災の今泉公会堂が再建

写真 2-326　再建された今泉公会堂
津波で被災した公会堂の再建を祝った

4月13日
しんち桜まつり

写真 2-327　総合体育館壁面に映し出されたデジタル掛け軸
ＮＰＯ法人みらいとが主催した「しんち桜まつり」

4月21日
協和発酵キリン卓球教室

写真 2-328　一流選手の指導を受ける参加者
協和発酵キリン卓球部のみなさんによる卓球教室

5月23日
あの日のできごとが紙芝居に

写真 2-329　紙芝居を披露する村上美保子さん
東日本大震災のできごとが紙芝居となった

6月14日
柔道スポ少に新たな団旗

写真 2-330　新たな団旗に活躍を誓う
津波で流失した団旗に変わる新しい団旗

6月26日
北海道せたな町から道高さん来町

写真 2-331　日本一の江差追分を披露する道高むつ子さん
民謡歌手の道高さんが被災地支援で来町した

7月6日
津波被災の消防団車庫再建

写真 2-332　用地の寄付を受け内陸側に移動して再建した

7月17日
埼玉県越生（おごせ）町の中学生と交流

写真 2-333　尚英中の生徒と交流した越生中のみなさん
震災支援で交流のある埼玉県越生中の生徒が来町

7月22日
震災がれきでアルプホルンを製作

写真 2-334　鹿狼アルプホルン倶楽部のみなさん
震災がれきを材料にしたアルプホルンを製作した

8月3日
根本復興大臣が視察

写真 2-335　復興事業の現場を視察する根本匠復興大臣
根本大臣が新地町を訪れ、加藤町長らと意見交換した

8月3日
３年目のやるしかねぇべ祭

写真 2-336　Bro.KONE さんのステージに盛り上がる会場
商工会青年部が主催したやるしかねぇべ祭

8月3日～9日
明大 week in 新地

写真 2-337　図書館での子どもたちへの学習支援
明治大学生が町内で様々なボランティア活動を行った

平成25年

8月27日
ガレキの中から見つかった版画

写真 2-339　女子美術大学附高・中の小川正明校長ら
津波で流失したが、小川校長らにより修復された版画

8月12日～16日
思い出倉庫　再開放

写真 2-338　お盆期間に合わせて開放された思い出倉庫
明治大学の学生が受付や案内など来場者の支援を行った

9月28日
オリンピックデー・フェスタ

写真 2-341　オリンピック選手らと町内の小学生が交流した
震災復興支援プロジェクトの一環としてＪＯＣが主催

9月19日
ハンカチプロジェクト

写真 2-340　自分がデザインしたハンカチを披露（新地小）
ＪＡＧＤＡが主催したハンカチプロジェクト

10月19日
安倍首相が新地町を激励

写真 2-343　加藤町長から復興状況の説明を受ける安倍首相
安倍晋三首相が新地町を訪れ、被災者を激励した

10月3日
台湾赤十字社のみなさんが視察

写真 2-342　台湾赤十字社の訪問団
台湾赤十字社の支援で建設した被災高齢者住宅を見学

震災の記憶　あの日、あの時

こころひとつに
（平成23年度 新地町少年の主張大会より）

阿部早也香さん（尚英中）

私は、新地町が大好きです。あの日、その大好きな町並みが、大津波で釣師の海に呑みこまれていくさまを、ただ呆然と立ちつくし見ているだけでした。それでも多くの町民の命が救われたのは、防災無線のおかげだと感謝しています。震災での恐怖と悲しみは一生忘れることはありません。多くを失いましたが、それと同じ、あるいはそれ以上に得たこともたくさんあります。被災者である私たちにもボランティアの輪や助け合いの精神が広がり、共に苦しみを乗り越えてきた方々との「絆」が大切な財産となりました。私たちに課せられたことは、震災前の新地町を取り戻すだけでなく、さらに美しいものに復興させ、後世に引き継ぐこと。必ず復興すると私は信じています。

10月27日
清水ボランティアネットワーク

写真 2-344　すずめ塚仮設住宅に
清水ボランティアネットワークのみなさん

10月29日
新地ライオンズクラブ マイクロバス寄贈

写真 2-345　復興に向けた町の足になってほしいと、復興支援のために贈られた

11月14日
復興まちづくり懇談会

写真 2-346　約 150 名が参加し、復興事業、避難道路、防災計画などについて懇談を行った

11月29日
相馬港LNG基地建設に関する基本協定を締結

写真 2-347　県庁で行われた締結式
町・県・石油資源開発㈱の三者で協定を締結

写真 2-348
LNG 基地建設地

震災の記憶 あの日、あの時

HAPPY BIRTHDAY
（平成26年度 新地町少年の主張大会より）

古山友萌さん（尚英中）

「お誕生日おめでとう」 大好きな家族に祝ってもらうはずだった12回目の誕生日。その日が、最悪の日に一変してしまうとは夢にも思いませんでした。

不気味な地鳴りの後、立っていられないほどの激しい揺れに襲われました。先生方の悲鳴にも似た指示のもと必死で校庭へ避難し、揺れが収まるのを待ちました。その日の夕方、家族と再会できた時には、感謝の思いを自然と口にしていました。テントの中、ランプの明かりをたよりに家族で食べた誕生日ケーキの味は一生忘れられません。

「震災学年」と言われた私たちも中学３年生となり、自分の将来について考えなければいけない年齢になりました。私の将来の目標は、社会福祉士の資格を取って、新しく生まれ変わった新地町で働くことです。人と人との結びつきを福祉の現場でつくり、あの時、一番大変な思いをされた方々に、今度は私が恩返しをしたいと考えています。

自然豊かで、住む人の心が温かい私たちの大切なふるさと・新地町を、震災のせいにして廃れさせてはいけないのです。復興した新地町をさらに新しい町へと再生させていくことが、私たち「生かされた者」の使命であると思います。

3月2日
交通死亡事故ゼロ 1000 日達成

写真 2-355　新地町は3月2日に交通死亡事故ゼロ1000日を達成
翌日には相双地方振興局長から達成を称える表彰状が伝達された

3月9日
消防団・県警による一斉捜索

写真 2-356　捜索方法を確認する団員・署員
震災から３年となる３月 11 日を前に、震災による行方不明者の一斉捜索を行った

3月11日
東日本大震災新地町追悼式

写真 2-358　多くの参列者が祈りを捧げた

写真 2-357　参列者による献花
遺族をはじめ、多くの町民が訪れ、犠牲者の冥福を祈るとともに、復興への誓いを新たにした

1月12日
平成 26 年　新地町成人式

写真 2-350　未来を担う 91 名が二十歳の門出を迎えた

1月1日
鹿狼山元旦登山

写真 2-349　平成 26 年の初日の出
まばゆい光を放つ初日。新年の幕開けを祝った

2月6日
町議会に全国町村議会議長会表彰

写真 2-352　加藤憲郎町長に受賞を報告した目黒静雄議長
新地町議会の復興に向けての取り組みが評価された

1月26日
仙台フィルが尚英中でコンサート

写真 2-351　シチズン時計㈱の支援により、仙台フィルハーモニー管弦楽団がミニコンサートを開催

2月16日
新地町体育協会 創立42周年記念式典

写真 2-354　記念講演で話しをする元プロ野球選手で楽天イーグルスジュニアコーチの川岸強さん

写真 2-353　震災の影響で延期を余儀なくされていた式典を開催。スポーツ振興功労者を表彰した

【新地町震災・復興記録集づくりワークショップより】

3月11日震災時はどのような行動をとりましたか 津波警報発令後はどのようにしましたか

家に戻り、
一人暮らしの家を廻り、
避難するように連絡をした
(60代 男性)

勤め先にいたが
防災無線の音が聞こえず、津波のことは知らずにいた
(50代 女性)

建物のガラスがバリバリと音を立てて割れたので
利用者の身体を支えながら
庭（瓦が落ちてこない所）に
避難した (50代 女性)

すぐに港から離れた。
役場方面に向かう道路は踏切で
渋滞だったが、誰かが踏み切りを
あげてくれて車が流れたので
国道まで行き自宅を目指した
(30代 男性)

避難場所(近くの)
への移動を
行なった
(女性)

家の片付け、
避難準備
(60代 女性)

何もできなかった
(30代 男性)

窓を開けて、
車のカギを
もっていた
(50代 女性)

妻子の無事を
確認しに
家に戻った
(男性)

車に荷物を詰め込み、
自宅が高台にあるので
様子を見ていた
(60代 女性)

あまりにゆれて、工場内に薬品などがあり、建物の中にいては危険と感じ、
消防訓練したように広場に集まり、工場にいた人全員が
揃い点呼してふるえていた
(50代 女性)

津波警報の
発令はラジオで
聞いた (60代 男性)

船を沖に
出した
(30代 男性)

立っていられる
状態でなかったので、
少しおさまるまで部屋にいて、
その後、庭に出た
(60代 女性)

消防団で活動していたので、
津波警報が
わからなかった
そしたら津波がくるのを
高台から見た (30代 男性)

すぐに外へ
しりもちをついて
その場から動けなかった
(20代 女性)

車のラジオを
聞きながら避難した
(50代 男性)